
ポケットモンスターの可能性

yugata

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターの可能性

【Nコード】

N8394V

【作者名】

yugata

【あらすじ】

機械とは本当に奇怪である。プログラム通りに動いているので人間の言うことは聞かない。しかし、たまに人間の言うことを聞く機械もある。その不思議なことを踏まえての不思議なポケモンの物語

ものがたりのものがたり（前書き）

ツヤガ「はい。こんにちは。私は作者代理です。詳しいことは他の小説で。今回は友人がポケモンの小説を書けばどうたらと言ったのでお試しに書いてみました。この小説が続くのか分かりませんがよろしく願いします」

ものがたりのものがたり

主人公「また最初からか」

ゲームの主「ポケモンって最初から始めると何故か飽きずに楽しめるんだよな」

オーキド「この世界は」

いつも通り台詞はスキップされる。そして名前が決まる

ゲームの主「どうしよっかな」

主人公「（また、レッドとかサトシになるのか）」

ゲームの主「ん〜。今回は、これでいこう。クズな主人公、クーズだな」

だが、その瞬間アドバンスの電源が切れる

ゲームの主「！？あれ。つかないぞ」

クーズ「なんだ？バグか。これで操られなくて楽だな〜。ていうかクーズは無いだろ」

天の声が聞こえる（台詞が出る枠が急に出てくる）

¥#+*^`"´´々々ゞゝ あ・・・あ、あ。これで喋れるか。デハハナソウカ

クーズ「さっきまで片言じゃなかったよな!？」

ウルサイ。ダメレクス

クーズ「クズじゃない。クーズだ」

クズ、ハナシヲシヨウ。オマエガクリアシナイトコノゲームハナオ
ラナイ。イヤ、オワラナイトイッタホウガイイカ

クーズ「？何を言ってるんだ！」

イツカワカル。ソレマデテキトーニガンバレ。クズ

そして急に消えた

クーズ「・・・とにかく最後までクズ呼ばわりだったな」

急に周りが明るくなる。そこは見慣れた、このゲームの主人公の部屋

クーズ「やるしかないな」

いつもは主に操られて動くクーズだが今回は自分の意思で動ける

クーズ「じゃあ早速きすぐすりを・・・!!」

ボックスにはハイパーボール999個だけが入っていた

クーズ「・・・」

謎の人物「クーズ。朝御飯よ」

階段を上がってきたのはお母さん、ではなかった

クーズ「……誰だ。テメー」

謎の人物「あら、酷いわね。貴方の母親の、マグマ団のしたっぱ（女）じゃない」

外見は、主人公であるクーズと同じ歳くらいだ

クーズ「（！そうか。今はバグでこの世界が壊れてるのか。だからって、これはないな）」

ゲームの主は様々なポケモンシリーズを同時にやっていたのでゲームが他のシリーズのゲームを覚えていたのだらう。それはクーズも同じであつた

クーズ「しょうがない。バグの中でもクリアしなくちゃな」

母親？「クーズ。昼飯出来たわよ」

クーズ「はやっ！まだ朝御飯も食べてないよ」

クーズ「しかし、いつもだったら草むらに入ればオーキド博士が来るが」

そもそも草むらがない

クーズ「どうするか。せめてポケモンを持ってないと」

持ち物はハイパーボールが99個ある

謎の人物「おい、クズ。ポケモン貰ったんだからバトルしようぜ」

クーズ「(まさか、この声は)・・・グリーンか」

グリーン「よう。バトルは知ってるだろ？よし勝負だ！」

グリーンはライバルの名前だ。何故かグリーンになっている

クーズ「ポケモンが居ないんだが」

オーキド「こら！ポケモンを持ってないのに草むらに入るんじゃない。・・・む。まだまだじゃの。もっと草むらに入って色々なポケモンを探すのじゃな」

クーズ「オーキド博士！？しかも台詞がごちゃ混ぜ」

グリーン「俺はチャンピオンになったんだよ。見せてやるぜ。最強の俺様を！」

クーズ「(くつ。突っ込みが追い付かない。だったら)」

逃げるコマンドを選択した

マサラタウンに居たがトキワシティに逃げた

クーズ「はあはあ。疲れた」

一気に駆け抜けたので息切れしている

クーズ「ランニングシューズは無いのかよ」

「ピッチュ！」

クーズ「？」

「ピチュ、ピチュ」

下から鳴き声が聞こえてくる

クーズ「この鳴き声は確か」

ピカチュウの進化前、ピチューだった

クーズ「凄いな。カントーなのに色々なポケモンが出るのか。よし、早速GETだぜ」

手持ちいっぱいハイパーボールを投げまくる

しかし、全て避けられる。そして、でんきショックを喰らい上手に焼けましたー！！

クーズ「くっそ。せめて手持ちにポケモンがいれば・・・！？」

いた。いつからいたのか知らないがいた

クーズ「ドジョッチ・・・だど・・・（水、地面、だからピチューには

有効だが何故ドジョッチを選んだんだ、このバグゲーム」

クーズ「考えても意味ねえな。いけ！ドジョッチ！」

「ドツ・・・ドジョ」

クーズ「水（泥沼）がないから死にそうだー！！」

そんなドジョッチにピチューはでんきショックを放つ。もちろん効果はない

クーズ「くっ。とりあえず、ドジョッチ どろばくだん！」

あのハイパーボールを避けたピチューがドジョッチのどろばくだんを喰らった。泥が目に入り命中率が下がる

クーズ「よし、そのまま。みずてっぼう」

体中の水分を頑張つて集めて圧縮した水を放つ

「ピチューー！！」

でんきショックでみずてっぼうに応戦した。だがドジョッチの勝ちだった。しかし威力の落ちたみずてっぼうを利用してピチューは目を洗った

クーズ「今だ！」

すかさずハイパーボールを投げる

ピッ

ピッ

ピッ

ポーン

クーズ「よっしゃ。ピチューを捕まえたな」

ボールを持ち一度出してみる

「ピチュー!!」

出てきた瞬間、クーズの腹にダイレクトアタックを決める

クーズ「うっぐ・・・こいつ」

こんなやりとりをしている間にドジョッチは、どんどん弱っていった

ものがたりのものがたり（後書き）

ツヤガ「早速、キャラ設定!!」

クーズ（男）

見た目は赤、緑、青の主人公。名前をレッドにしようかと思ったが、なんとなく止めた。（ライバルはグリーンなのにな）
性格はアニメのサトシに近付けようかと

クーズ「しかし、ライバルは完全に俺のことクズって言ったよな」

ツヤガ「まあ、いいじゃないですか。クズなんだし」

クーズ「はー？俺はな。ゲーマーであるゲームの主にも何回も操られながら何回もチャンピオンになったんだぞ」

ツヤガ「そうですか。まあ、そうですか」

クーズ「（こいつ、ムカつくな）」

ツヤガ「それではこの辺で。ばいばい」

ものがたりのポケット

クーズ「ドジョッチー!!」

今、ピチューをボールによやく入れたがドジョッチが干からびている

クーズ「早く。ポケモンセンターに」

だがポケモンセンターの場所を見た瞬間、固まった

そこには、ポケモンジムがあった

クーズ「あれ？トキワは最後のジムだったよな。え？じゃあジムがあった場所は」

ポケモンセンターがあった

クーズ「あゝ。入れ替わってるのか」

そして入れ替わったポケモンセンターに入る

謎の人物「よく来たな。クーズよ。お前は私を何度邪魔す」

ブーン（ドアを開けた音）

クーズ「なるほど。あれはジムだったのか。サカキが何か言ってたが無視だな。そうするとジムの形したポケモンセンターが本物か」

ジムに行く。だが開かない。原作ではジムリーダーが留守で開かない。そう、だから、こちらも開かないのだ

クーズ「・・・回復出来ないんですけど」

だが幸い草むらが無いので野生のポケモンには会わない

クーズ「ん？待てよ。このバグゲームなら酔っ払いのオジサン居ないんじゃないか」

いつもいる場所を見る。そこにはポケセンの受付のお姉さんがいた

クーズ「え？・・・回復出来るんですか？」

ジョーイ（名前合ってる？）「はい。こちらにポケモンを渡して下さい」

クーズ「あ、はい」

てん、テン、テロリン

ジョーイ「はい。皆元気になりましたよ」

クーズ「（浮いてたよな。ボールが浮いたよな）」

バグで機械は見えないらしい。だから浮いたように見えたのだ

クーズ「このゲーム。本当に大丈夫かよ」

そして次の目的地トキワの森に入る

クーズ「!？」

目の前から飛んでいる大量のむしとり少年が来た

クーズ「!!!何これ。とにかく逃げろー」

ゲーム説明：上から来るむしとり少年を避ける。自分が移動出来るのは右か左だけだぞ。むしとり少年は早い奴や遅い奴がいる。惑わされずいこう

クーズ「ふ〜。別ゲームになったな」

難易度は低かったので問題なくクリアした

そしてニビシティに着いた

クーズ「流石にポケモンのレベルを上げないとタケシには勝てないよな」

だがトレーナーも野生ポケモンも居ない。いや、トレーナーは居たが

クーズ「!!!いいこと、考えた。こい、ピチュー」

出てきてまたダイレクトアタックをする。が、今度はクーズに止められる

クーズ「よし。これで何もできまい」

ピチューを両手でしっかりと掴んでいる。もちろんゴム手袋はしている

クーズ「ピチュー。お前は何処から来たんだ？」

「ピチュ、ピチュー」

クーズ「？」

なんとなく、放した

「ピチュー！ピチュー！」

どうやら上を指しているらしい

クーズ「上から来たって。どこのラピ。ただよ

「ピチュ！ピチュ！」

怒っているようだ

クーズ「怒られてもな。どうするんだよ」

謎の人物「H A I H A、H A！よう、皆のヒーロー。ワタルだよ」

カイリューに乗ってやってきた

クーズ「・・・（なんか、来た）」

ワタル「いやゝ。クズ君久しぶり。いつもカイリユーがやられてたよ。全く、君は強いな。H A H A、H A！」

クーズ「（ワタルさんがキャラ崩壊してるー！！）えっと、どうしたんですか」

ワタル「空に行きたいのだろ。任せなさい。私が連れてって上げよう」

クーズ「え？なんで？」

問答無用でカイリユーに乗せられ空に向かう

ワタル「クーズ君は知らないかもしれないから話そうか。今、このゲームはバグを起こしている。ゲームの主がゲームを出来ないから、皆、自由に動いているのだよ」

クーズ「（建物も自由に動いてたな）」

ワタル「だから、私がここにいるのだ」

クーズ「へゝ。そうなんですか」

ワタル「では、頑張ってくれたまえ。私は、まだ旅をするからな」

カイリユーに乗って何処かへ行つた

到着したのは、あたり一面、白いタイルみたいのが敷かれている雲

の上だった。柱が何本か立っている

クーズ「これは・・・？」

「よく来たな。クーズよ」

クーズ「誰だ！（脳に直接話しかけられる感じ。ポケモンか）」

「我の名はアルセウス。神だ」

クーズ「アルセウス！！（まさか！ピチューはアルセウスによって作られたポケモンなのか）」

「違う。そのピチューは可愛かったから、さらってきたのだ」

クーズ「心読むな。そして神なのにさらうなよ！（？なんだ、あの首飾り）」

「可愛かった」

クーズ「いや・・・知らないから」

「まあいい。我と戦いに来たのだろ？」

クーズ「目的は、よく分からないが、そうだと思うぜ」

「では、始めるか。そっちはピチューとドジョッチを出すのだな」

クーズ「最初から、そのつもりだ。いけ、ピチュー！ドジョッチ！」

相手は神と言われているポケモン。恐らく、ピチューとドジヨッチで倒せる相手じゃないな。だが勝算はある

ものがたりのポケット（後書き）

ツヤガ「あれね。もうアルセウスが出ちゃった」

クーズ「いや。その前にピチューとドジヨッチじゃ倒せないだろ」

ツヤガ「最後に 勝算はある って言ったから多分平気だよ」

クーズ「それならいいけど」

ツヤガ「感想とかテキトーに待ってまゝす」

ものがたりのモラル

クーズ「よし、ピチュー。でんきショック！ドジョッチ。どろばくだん」

二匹の攻撃がアルセウスを襲う

「そんな技喰らわないわ！！」

ハイパーボイスで二人の攻撃を無効化する

クーズ「やっぱり。無理か」

「今度は、こちらから行くぞ！！」

「ドジョ・・・？」

ドジョッチに向けて、あくうせつだんが放たれる。しかし、ヌメヌメしているドジョッチは滑って当たらなかった

クーズ「えー！！ドジョッチ有り得ないだろ。・・・いや、チャンスだ。ピチュー、わるだくみ」

「ピチュー、ピチュー」

「ドジョッチ、ごときに。ならば、はあ！！」

ときのほうこうがドジョッチを狙う。だが同様に避けられる

クーズ「ドジョッチがここまで時間を稼いでくれるとは」

その間にピチューはわるだくみを、やりまくる

「ならば、見せてやろう」

アルセウスの色が緑色に変化する

「喰らえ!!」

クーズ「!!ドジョッチ」

アルセウスが使った技はリーフストーム。水、地面のドジョッチは一撃だろう

クーズ「とどけー!!」

走ってドジョッチを助けようとする。だが間に合いそうにない

クーズ「（くそ。・・・!?!）」

突然、足がバグを起こす。そして戻った時には

クーズ「ランニングシューズ!!よし、これなら」

靴の力を借り早くなったクーズはドジョッチを捕まえる

「ドジョー!」

しかし、滑って手から飛び出る。そしてクーズがいる場所にアルセ

ウスのリーフストームが炸裂した

「よく、死ななかったな。クーズ」

クーズ「危ないな！死ぬかと思ったぜ」

驚異の身体力でリーフストームを避けた。だが服は切れている所が多々ある

クーズ「（緑になった瞬間リーフストームか。恐らくタイプを変えたな。確かアルセウスのタイプを変えるにはプレートが必要なはず）」

「ピチュ！ピチュ！」

わるだくみで特攻が最高レベルになった

「ふむ。ならば倒すのみ！」

色が黄土色になる

クーズ「やばい。あれは地面タイプ。ピチュー。避ける！」

だいちのちからがピチューを襲う

クーズ「ドジョッチ。マグニチュード！！」

「ドジョー！」

クーズ「（これでアルセウスの攻撃を粉碎するしかない。あとはマ

グニチュード次第だ」

マグニチュード

10

クーズ「よし、いけー!!」

アルセウスのだいちのちからと、マグニチュード10がぶつかる。
だがアルセウスのだいちのちからは防げなかった

クーズ「ピチュー!!」

だいちのちからで吹っ飛ばされる。クーズはピチューをナイスキャ
ッチした

クーズ「ピチュー!大丈夫か?」

「ピチュ・・・」

弱っているが、まだひんしではない

「!?!いくらドジョッチのマグニチュードで弱くなったといえ、ピ
チューが耐えただと」

クーズ「・・・はっ!そうか。アルセウス!お前がだいちのちから
の前に使った技を思い出せ」

「我が使った技。そうか、リーフストームか」

リーフストームは強力な技だが使うと反動で特攻が下がる

クーズ「ピチュー、頑張れ。お前が居ないと、この勝負勝てない！」

「ピチューー!!」

空気がだるうが元氣を出した

「面白い。ならば本氣を見せてやろう!!」

空気が変わる。今まで封じていた力が解放される

「一撃で終わらせよう。はあああ!!」

クーズ「さばきのつぶてか。ピチュー、さばきのつぶてに向かって、でんじは」

「ピチューー!!」

さばきのつぶてに電氣が混じる

「私の攻撃を強くして、どうするのだ」

クーズ「これはドジョッチなどのヌメヌメの奴を確実に捕まえられる手袋！」

どこから取り出したか知らないが手袋をした

クーズ「ピチュー。ドジョッチ。いくぞ」

ピチューを抱え、ドジョッチを掴む。そしつ、さばきのつぶてをギリギリまで近付けてジャンプをして上に行った

クーズ「よし。ピチュー。俺たちに、でんじはだ」

「ピチュ?」

クーズ「大丈夫だ。俺を信じろ」

自分たちにでんじは、がかけられる

「なるほど。私の攻撃にしたでんじはは、今やったでんじはと違う電極か」

クーズ「そうだぜ。これで俺は浮く!!」

反発力により高く浮いた

クーズ「よし、いっけー!」

ハイパーボールをアルセウスに投げる。その瞬間

クーズ「ピチュー。フルパワーのでんきショック!ドジョッチ、みずてっぽう!」

アルセウスはハイパーボールを避けた、すぐでありピチュー達の攻撃に反応が遅れた

「だが、まだ甘いな」

アルセウスの色がまた緑になる

クーズ「草タイプ。くそ。でんきも水も効きにくい（あのタイプ変化を止めないと）」

二匹の技を合わせた技はあまり喰らわなかった

クーズ「だったら。ピチュー、でんじは。ドジョッチ、みずあそび」

落下しながらだが命令をする。みずあそびで範囲が広がったでんじはがアルセウスに当たる

「ぬうう」

クーズ「（あのタイプ変化はプレートによるもの。だったら何処かにプレートを持ってるはず）」

「ドジョー！」

ドジョッチの尻尾がクーズの首に当たる

クーズ「あれかー！」

首飾りをアルセウスはしていたが、そこにプレートがあつた

クーズ「（・・・俺が取りに行くしかないな）ドジョッチ、ピチューー。俺を背中から叩けー！」

「ドジョー!」「ピチュー!」

二匹の尻尾に思いっきり叩かれる。そして、加速してアルセウスに近付く

「でんじは、じときー!」

アルセウスは力で、でんじは無理矢理、解除した

クーズ「もらったー!」

アルセウスの首飾りを掴む。落下したスピードがあるので首飾りは簡単に外れた

「!?首飾りを」

クーズ「よし。ピチュー!ドジョッチ! でんきショック、みずのはどう」

「ドジョー!」

「ピチューー!」

二匹の技が同時に放たれみずのはどうの輪にでんきショックが混ざる

「ぐわあああ」

わるだくみでフルパワーのでんきショックと、みずのはどう、がアルセウスに直撃する。そしてアルセウスは倒れる

ドーン!!

クーズ「いつてー！！！！」

かなりの距離から落ちたが主人公の補正で平気だった

クーズ「やべ！ピチュー！ドジョッチ」

二匹は、まだ落下している。だが落下地点はクーズの所だ

クーズ「嫌な。予感しか！！」

ピチューとドジョッチがクーズに体当たりをする

「ピチュ！」

ピチューは元気そうだ。ドジョッチは、みずのはどう、を使い干からびそうだ

「よく、私の分身を倒したな」

クーズ「へ？分身」

立ち上がったクーズの目の前にアルセウスがいた

クーズ「わあ！びっくりした。それより分身って」

「ああ、そこで寝てる奴は私の分身だ。流石に本物の我と戦ったら勝ち目はないからな」

クーズ「はあ。なんだよ。本物に勝ったと思ったのに」

「まあ、あれだ。これは【神々の遊び】だ」

神々の遊びと言ったところは、いつのまにか復活したアルセウス（分身）とタイミングを合わせて演技しながら言った

クーズ「・・・そうか。あ！今、気付いたが俺はどうやって戻るんだ？」

「我の力を使えば簡単だ。その前にポケモンを回復させよう」

アルセウス戦で傷付いた二匹が回復していく。（ピチューは傷が治り、ドジョッチは潤いが戻る）

「クーズ。これからお前には様々な困難があるだろう。だが負けるな。全てが終わった時に後悔しないようにな」

クーズ「え？ちょ、まっ」

「神は乗り越えられる試練しか与えないか・・・。我ながら良いことを思いついたな」

くニビシテイ

クーズ「あいつら話聞かねえな。・・・よし、ジム戦に行くか」

ものがたりのモラル（後書き）

ツヤガ「特攻とか下がるのは関係してきますね。もちろん上がるのも」

クーズ「ドジョッチ。ありがとな。お前のヌメヌメが無かったら負けてたぜ」

ボールの上から撫でる

「ピチュー！！」

勝手にボールから出てクーズの腹に体当たりする

クーズ「いって・・・なんだよ。ピチュー」

ツヤガ「（やきもちかな？）」

「ピッ！」

拗ねたピチューだった

ツヤガ「気にしちや駄目なんだろうけど、ヌメヌメで特殊攻撃って避けられないよね。まあ、気にしちや駄目なんだろうけどさ」

クーズ「最初から気にしちや駄目ってええよ」

ツヤガ「ピチュー、でんきショック！」

「ピチューー!!」

クーズ「ピチュー、お前・・・」

バタッ

ものがたりの長寿（前書き）

ツヤガ「あゝ、暑い。夏は暑いよ。今回の話に燃えるって書いてあります。夏がさらに暑く感じるかもしれないね」（ないか）「

ものがたりの長寿

クーズ「・・・またポケセンと入れ代わってるのか」

トキワと同じでジムとポケセンが入れ代わっている

クーズ「！そうだ。博物館行こう」

〈博物館〉

受付「入場するには一人、500円払ってください」

クーズ「（なんで、ぼうそうぞくが受付なんだよ。しかも地味に高くなってるし）はい。500円です」

受付「あゝ、ポケモン一体につき追加で100円です」

クーズ「流石にそれは・・・」

受付「んだと！！やんのか、ゴラァ」

クーズ「・・・ポケモン勝負ならやりますよ」

受付「ほゝ、小僧、この前世ポケモンチャンピオンと言われる俺とやるのか？」

クーズ「（前世なんだ）いいですよ。強い相手の方が燃えます」

（移動）

審判「では、両者位置に！」

クーズ「（なんでタケシが審判なんだよ。ジムは、どうした！）」

タケシ「ルールはそれぞれ一体ずつの一本勝負。では、始め！」

受付「いけ！ホウオウ！」

クーズ「ピチュー、お前に決めた！」

「ホーホー」「ピチュー！」

受付はホウオウというニックネームのホーホーを出した（一度は考えるネタだよね）

受付「こっちからいくぜ！！。ホウオウ、たいあたり！」

前世ポケモンチャンピオンと言われてるだけ、かなりのスピードだ

クーズ「ピチュー、避けてから、でんきショック！」

「ピチュー！」

ホーホーのたいあたりをジャンプしてかわし、でんきショックを放つ

受付「甘いな。ホウオウ、とっしん！」

たいあたりの時より速い動きでピチューのでんきショックを避け、落下してきたピチューを攻撃する。空中で何も出来ず喰らう

クーズ「ピチュー！」

受付「カスだな。・・・！？」

ホーホーが麻痺している

クーズ「そうか、ピチューの特性、せいでんきか！。よし、ピチュー今だ。でんきショック！」

ホーホーは麻痺で動けない

受付「ハハハ、まだだ。ホウオウ、サイコシフト！」

クーズ「なに！」

サイコシフトは自分の状態変化を相手に写す攻撃である（特性のシンクロと一緒に）

「ピッ、チューー！！」

でんきタイプのピチューは麻痺くらいなら平気だった。そしてホーホーに攻撃が当たる

受付「！？ならば。ホウオウ、ねんりき」

「ホオーーー！！」

超能力によりピチューが浮き何度か地面に叩きつけられる

クーズ「（このままじゃ、ゴリ押しされる。どうにか・・・）」

タケシ「クーズ君。元ジムリーダーから言つことがある」

クーズ「え？」

タケシ「ポケモンに不可能はない。いくらだって強くなれる。可能性は無限大だ」

クーズ「・・・。ピチュー！お前ならできる。十万ボルト！！」

「ピチューー！！」

受付「ハウオウ。負けるな！エアスラッシュ！」

今、二匹の技がぶつかり合い爆発を起こす

クーズ「ピチュー！」

受付「ハウオウ！」

煙が全て引いた時

タケシ「勝者、クーズ」

クーズ「よっしゃあ！ピチュー。うげふ」

抱きつこうとしたが蹴られた

受付「ちつ。しょうがない。バトルに負けたからポケモンの代金は無しだ」

謎の人物「コラア！バイト！なにをサボってるんだ」

受付「やべ。見つかった」

博物館の係の人「すいません。このバイトが、なにか、やらかしたようで」

クーズ「いえいえ。こちらもバトル出来たのでいいですよ」

博係「なに！そんなことしてたのか！！」

受付「まあ、いいじゃねえかよ。気にすんな」

博係「バイトのくせにうるさい！本当にすいません。御礼と言っ
ては、なんですが、これを」

クーズ「これは・・・」

みずみず玉を貰った

博係「これは水タイプに持たせると喜びます」

クーズ「（喜ぶ・・・）」

博係「では」

バイトの受付と一緒に博物館に帰った

クーズ「あ！タケシさん」

タケシ「ん？なんだい」

クーズ「さっき、元ジムリーダーって」

タケシ「ああ、それが。これは二時間前に起こった出来事だ」

タケシ「挑戦者か？」

謎の人物「いや、侵略者だな」

タケシ「！？」

タケシ「気付いたらジムの外さ」

クーズ「（侵略者か）じゃあ今からジムに行くから一緒に行きますか？」

タケシ「そうだな。さっきは何も出来なかったから今度は、あいつらみたいに追い出してやるか」

クーズ「あ！そうだ。ドジョッチ」

ボールからドジョッチが出てくる、もちろん地面なので時間が経てば死ぬだろう

クーズ「ドジョッチ。みずみず玉だぞ」

ドジョッチに持たせる。すると潤いが出てきた

「ドジョー!!」

クーズ「お！元気でたでた。これでドジョッチは地面でも平気だな」

タケシ「じゃあ、ポケセン寄ってから行くか」

ものがたりの長寿（後書き）

クーズ「ピチュー。なんで抱きついちゃ駄目なんだよ」

「ピッ、ピチュ！」

クーズ「？分かん」

ツヤガ「ピチュー、こっちにおいで」

「ピチュー！！」

ツヤガに抱きつく

クーズ「（あれが、ピチューはオスなのか）」

ものがたりの軸

クーズ「（ポケセンがジムだと迫力ないな）」

そんなことは気にせずジムに入る

謎の人物「あれ〜？今、ここは私達、【デフェクト団】の物ですよ。勝手に入って来られては困ります」

タケシ「何を言っている！！ジムリーダーの交換は正式な物が」

謎の人物「黙れ。いんだよ、侵略したから」

クーズ「だったら、侵略し返せばいいんだな？」

謎の人物「へ〜。お前、俺に勝てると思ってるの？」

クーズ「やってみなきゃ。分かんないだろ？」

謎の人物「ハハハ。いいだろう。俺の名前はグストだ」

クーズ「俺はクーズだ」

タケシ「では、両者位置に！」

今、二人の戦いが始まる。果たして結果は、どうなるんだ

グスト「いけ、デンリュウ！」

クーズ「ドジョッチ！お前に決めた」

グスト「（水、地面か。相性悪いな。だが）デンリュウ、シグナルビーム」

クーズ「ドジョッチ、避ける！」

ヌメヌメ補正で地面を滑りながら移動する

グスト「シグナルビームを右、左、真ん中の順に撃て！」

右に撃ちドジョッチが止まり左に行こうとする。そこにまたシグナルビームが来てドジョッチは混乱して動きが止まる

クーズ「くつ。ドジョッチ。シグナルビームに、みずのはどう！」

だがドジョッチが放つ前にシグナルビームが当たる

グスト「まだまだ！デンリュウ、ほのうのパンチ！」

ドジョッチにデンリュウが近付く

クーズ「ドジョッチ、マグニチュードで応戦だ！」

「ドジョ！」

グスト「ジャンプでかわせ！」

「デン！」

ジャンプでかわす

クーズ「よし、今だ。ドジョッチ、みずてっぽう！」

クーズは避けることを計算に動いていた

グスト「ククク・・・ハハハ！！デンリュウ、ドレインパンチ！！」

クーズ「なに！！」

またグストも裏の裏を読んでいた。みずてっぽうで火を消された逆の腕でドレインパンチを使う

「ドジョー！！」

クーズ「ドジョッチ！！」

タケシ「ドジョッチ、戦闘不能」

クーズ「くそ。ドジョッチ、ありがとな」

ドジョッチをボールに戻す

クーズ「次は、こいつだ。こい、ピチュー！！」

「ピチュー！」

グスト「はぁ？ドジョッチとか出してる時点でおかしいと思ったが進化させとけよ」

クーズ「うるせえ。まだ始めて数時間しか経ってないから、しょうがないだろ」

グスト「まあ、この程度なら即行で倒せるな。デンリユウ、シグナルビーム！」

クーズ「避けてから、でんきショック」

シグナルビームを避け、デンリユウにでんきショックが当たるが、あまり効いていない

グスト「シヨボいな。デンリユウ、パワージェム！」

無数の岩がピチューに向かって飛んでくる

クーズ「パワージェムと自分に、でんじは！」

アルセウス戦で身に付いた電気の力を利用した技である

グスト「だったらデンリユウ、ほのうのパンチ！」

クーズ「（くっ、ピチューじゃ有利な技がない）ピチュー！十万ボルト」

グスト「待ってたぜ！デンリユウ、じゅうでん！」

クーズ「！？」

デンリユウは、ほのうのパンチを直ぐ止め、ピチューの十万ボルト

を吸収した

グスト「よし。デンリユウ、かみなりパンチ！」

「ピチューー!!」

グスト「（このままじゃ、負ける）」

グスト「終わりにするか。デンリユウ、かみなり!!」

「デーン!!」

クーズ「ピチューー!!」

かみなりパンチで吹っ飛ばされたばかりで反応できない。かみなりはピチューに当たり煙を大量に出した

グスト「ハハハ、俺の勝ちだな」

だが明らかにおかしい。何か音がしている

クーズ「?なんだ、このパチパチする音は」

煙が少し引いたところで正体が分かる

グスト「電気が!？」

そこには、電気を抑えきれないピチューがいた

クーズ「（なんだ、この感じ）ピチュー、十万ボルト!!」

「ピッチューー！！！」

グスト「デンリュウ、じゅうでん！」

「デン！」

じゅうでんでピチューの十万ボルトは吸収されるが、ピチューは止まらない

グスト「（くっ、このままだと）」

クーズ「よし、一気に畳み掛ける！」

さらにピチューの十万ボルトの威力が上がる。デンリュウは全て吸収できず十万ボルトを喰らう

タケシ「デンリュウ。戦闘不能！」

グスト「（あの威力。なかなか面白いな）審判、俺の手持ちは、もういないから俺の負けだ」

クーズ「おい、まで」

だが無視してジムを去っていった

タケシ「あのグストって奴、まだボールを持っていたな」

クーズ「え？じゃあ、さっきのは」

タケシ「何かの理由で嘘をついたんだろう」

クーズ「あ、ピチュー」

ピチューは倒れていた

タケシ「！酷い熱だ。早くポケセンに連れていこう」

ものがたりの軸（後書き）

ツヤガ「毎回、みんな覚醒していくよ。これじゃ相手が可哀想じやん」

クーズ「じゃあ俺の手持ち増やす、しかないでしょ」

ツヤガ「それがね。ポケモンを何にしようか迷ってるんだよ。全員出れるから選択肢が多くて」

クーズ「カッコいいポケモンを希望!!」

ツヤガ「もちろん。あまり使われないポケモンを使うよ」

クーズ「（それってカッコ良くも強くもないよな）」

ものがたりの歓喜

ジョーイ「今は安定していますけど、このピチューは、どうしたんですか？」

ピチューをポケセンに連れていきジョーイさんに診てもらった

クーズ「実はカクカクシカジカなんです」

ジョーイ「・・・なるほど。一度ピチューの精密検査をしてみませんか？何か分かるかもしれません」

クーズ「そうですね。よろしくお願いします」

タケシ「クーズ君。俺はジム関係で色々あるから帰るね」

クーズ「あ！色々ありがとうございました」

タケシ「なに、大したことないよ。じゃあね」

クーズ「（このバグゲームでも良い人いるんだな）」

く敵陣く

グスト「だから謝ってるだろ」

謎の人物A「謝って済む問題じゃない」

謎の人物B「キャハハ。流石、問題児ね」

グスト「んだとー!!」

謎の人物C「あわわ。落ち着いて下さい」

グスト「ちつ。覚えておけよ、752」

752「ええ、いいわよ。貴方がカスだってことを覚えるわ」

グスト「やつぱ、今から殺すー!!」

謎の人物A「二人とも止めろ!あの方に報告するぞ」

二人とも急に黙る

謎の人物A「で、グストは何か分かったのか?」

グスト「ああ?・・・そうだな。分からないと言っておくさ」

謎の人物A「・・・まあいい。今度から自重して行動しろ」

グスト「へいへい」

くポケセンく

クーズ「ありがとうございました」

ピチューの精密検査をしたが結局何も分からなかった(健康体だっ

た)

クーズ「よし、次はハナダシティのジムだな」

〈三番道路〉

クーズ「ピチュー、十万ボルト!!」

「ピチュー!!」

ポケトレ(女)「私の可愛い。ミズゴロウが!?!」

クーズ「(原作と、かなりポケモンが違って楽しいな)」

無事にお月見山の手前のポケセン着いた

クーズ「よし、トレーナーがいたからレベル上げも、そこそこ出来たな」

だがポケセンの前に人影ならぬポケ影がある

クーズ「あのシルエットは?」

「・・・カモ」

クールなイメージのカモネギである

クーズ「(カモネギさんだー!!嘘だろ。あのカモネギさんが!!)」

そこまで褒めることもないだろう

クーズ「よし。早速ゲットだな。お前に決めたピチュー!!」

「ピチュー!」

出てきた瞬間カモネギが動く

クーズ「!?ピチュー。避ける」

だがカモネギの動きが読めず、れんぞくぎり、を喰らう

クーズ「でた!カモネギさんの、こうそくいどう、からの、れんぞくぎり、コンボだ!」

どこかのカードゲームのキャラの台詞をパクっているクズを無視してピチューは、でんじは、を放つ

「・・・カモ」

しかし、こうそくいどう、で早くなったカモネギに攻撃が、なかなか当たらない

「ピチュ」

そしてピチューは怒った

「ピチュー!!」

まずクズを焼き焦げにする

クーズ「ピチュー・・・何故・・・」

カモネギもピチューの殺気を感じたのか構える（ネギを鞘に収めた感じ）

ピチューも対抗して構える（ほっぺを詰まんでいつでも放電できるようにする）

二人とも構えて動かない。だが沈黙の時間に終止符が打たれる

風が吹いた

ピチューとカモネギが同時に動く

「ピチュー！」

「カモ！」

ピチューの十万ボルト、カモネギの、いあいぎり

先に体が地面についたのは・・・

ピチューだった

だがカモネギもその後、直ぐに倒れた

クーズ「！？カモネギ捕まえるチャンスだ！」

何故か復活したクーズがハイパーボールをカモネギに投げる

ポン ポン ポン

ポポポポーン

クーズ「よっしゃ。カモネギGETだぜ!!」

何か変な音がしたが気のせいだろう

クーズ「今、気付いたけどポケモン図鑑がないな」

何故か、カモネギを捕まえて思い出した

クーズ「じゃあ、早速」

「・・・カモ」

クーズ「よろしくな。カモネギ」

「・・・ピチュー!!」

倒れてから放置されていたピチューが怒りクーズにまた十万ボルトを喰らわせる

クーズ「ピチュー。少しは、なつけ・・・グタ」

「・・・カモ」

「ピチュー」

ものがたりの歓喜（後書き）

ツヤガ「短いかもしれなかったね」

クーズ「まあ、気にしなきゃ問題ない」

ツヤガ「カモネギが新しく仲間になりましたね。これで苦手な草タイプを克服した」

クーズ「しかし、またネタポケモンだな」

ツヤガ「色々面白い技を覚えるから小説書きやすいのだよ」

クーズ「そうですか」

ものがたりの勝利者（前書き）

ツヤガ「言っの遅かったです。が、キャラ崩壊注意です!!」

ものがたりの勝利者

クーズ「お月見山か。ズバットはピチューに任せると。イシツプテとかはドジョッチで、ごり押しするか」

お月見山に入る前に作戦を考える。だが原作と違えば何の意味もない

クーズ「よし持ち物も大丈夫だから行くか」

お月見山を抜けてハナダシティに行くと少しの間ニビシティやマサラタウンに行けなくなる

「お月見山の中」

クーズ「変わった所は特にないな」

だが戦闘に入る

クーズ「!？」

相手はクチートだった。見た目は可愛いが後ろの口みたいな物は噛まれるので危険である

クーズ「よし、ドジョッチ。stand stage!」

台詞を変えてみた。・・・微妙である

クーズ「一気に終わらせる！マグニチュード」

マグニチュード7

「ドジョー！」

「チート！」

てっぺきをしてマグニチュードを防ぐ。鳴き声は・・・

「クチクチ」

クチートは、うそなきを使った。これで大体の野郎共は落とせる。
しかし今回は相手が悪かった

クーズ「ドジョッチ！なんかチャンスだ。もう一回マグニチュード
！」

マグニチュード9

「ドジョー！！」

二人とも（一人と一匹）は乙女の心なんて何にも分からない

「クチー」

マグニチュードを、もろに喰らい戦闘不能になった

クーズ「よし、どんどん進むぞ」

順調にお月見山を攻略していく。ポケモンは主に、ズバット、クチート、イワーク、ノコッチなどだった

クーズ「しかし手抜きだな」

お月見山に人は居なかったが化石の所にさえ誰も居ない

謎の人物「待て!!」

クーズ「？」

謎の人物「化石は全て僕のものだ!! 誰にも渡さない!! 渡さないなら倒すのみ!!」

クーズ「(キャラ崩壊してるダイゴさん、きたー!!)」

ダイゴ「(石、石、石石石、石、石)」

クーズ「(なんか小声で言ってるよ。分かんない。怖いよ)」

ダイゴ「貰ったー!!」

クーズの隣にある化石達を狙って猛ダッシュ

ダイゴ「ウゲフー!!」

だが石に躓き大胆に転ける

ダイゴ「こんなはずじゃ。・・・こんなはずじゃー!!」

なんか地面を叩きながら悔し涙を流している

クーズ「……」

クーズは啞然としている

（；。㇏）↑こんな感じ

ダイゴ「すまない。見苦しい所を見せてしまった。私はダイゴ。ど
つかの地方のチャンピオンだった人さ」

クーズ「俺はクーズです。チャンピオンって凄いですね」

ダイゴ「いや、大したことないよ。鋼タイプでガチガチにすれば余
裕さ」

クーズ「……そうですか」

ダイゴ「君は、この化石の所有者かい？」

クーズ「えっと……多分そうです」

ダイゴ「なるほど。ここは平等にポケモン勝負と、いこうではない
か！」

クーズ「（この化石は俺のなに！？）」

ダイゴ「さあ、一対壱でいこう」

クーズ「（いやチャンピオンの实力を見たいから、いいか）そのか
わり勝ったら好きな方を選ぶでいいですか？」

ダイゴ「・・・フツ。いいだろう」

クーズ「よし、じゃあカモネギ。stand stage!」

「・・・カモ」

ダイゴ「（カモネギか。メタグロスで余裕だな）」

説明はフラグ

ダイゴ「いけ。メタグロス!!」

「ノコ」

ノコツチが出てきた

ダイゴ「しまった!さっき捕まえたノコツチが!!」

まさに大誤算!!

クーズ「これが言いたいだけだろ。カモネギ、こうそくいどう、
らの、れんぞくぎり」

ピチューに攻撃を当てたコンボを使う

ダイゴ「（いや、元チャンピオンの僕なら補正とかが）」

無論、ない。ノコツチは攻撃を受け続ける。れんぞくぎりは連続で
当たれば当たるほど威力が上がる

クーズ「よし。終わりだ！とどめのれんぞくぎり！！」

カモネギの一撃がノコツチを襲う

ダイゴ「フツ。まだまだ甘いよ。クーズ君」

クーズ「！？」

ダイゴ「ノコツチ！いかり！！」

「ノコーー！！」

いかりは攻撃を受ける度に威力が上がる。れんぞくぎりで何回も攻撃を受けていたノコツチ

「カモー」

カモネギは壁まで一撃で吹っ飛ばされる

ダイゴ「これが元チャンピオンの実力さ」

クーズ「（あのカモネギを一撃で・・・）流石ですね」

カモネギをボールにしまう

ダイゴ「では、約束通り・・・2つとも貰っていくぜー！！」

クーズ「！？あ、ちょ」

ダイゴ「ハハハ。奪えばいんだよ。奪えば！」

かなりキャラがイカれてる。だが神様は、しっかり見ている

ダイゴ「よしメタグロスで、この壁を壊して逃げるぞ。いけ、メタグロス！」

「ノコ」

ダイゴ「またお前か！！！」

走っていたダイゴは急に止まれずノコツチにぶつかり転んだ

ダイゴ「・・・僕が悪いんじゃない。化石が悪いんだー！！」

クーズ「・・・あの、もういいんで、一つくださいよ」

ダイゴ「え？いいの？」

目がキラキラしている

クーズ「・・・もう、いいです」

ダイゴ「キャー。やったー。私、化石貰ったわ。ラッキー！！」

クーズ「（うぜー！！）」

ダイゴ「では、僕はこちらで」

クーズは、こうらのかせき、を返して貰った

ダイゴ「僕はまだこの山を調べるからね。じゃあね」

クーズ「あゝ、はい。また会えるといいですね」

厄介な奴と別れられて良かったと思ったクーズだった

ものがたりの勝利者（後書き）

ツヤガ「ダイゴさんは、もう流石しか言い様がないね」

クーズ「色んな所でキャラ崩壊してるもんな」

ツヤガ「皆さんはサブタイトルで ものがたりの〜〜 が気になっ
ていますか？」

クーズ「ああ。今回は ものがたりの勝利者だったな」

ツヤガ「実はあれ・・・」

クーズ「（なにがあるんだ？）」

緊迫した空気が流れる

ツヤガ「何も意味が無いんです」

クーズ「なん・・・だと・・・」

ものがたりの付和雷同

クーズ「まずはゴールドンブリッジを閉鎖するか」

要するにゴールドンブリッジを攻略するという意味である

トレーナー（男）「俺の闘志、ファイヤーが！」

クーズ「なんでファイヤーがいるんだよ」

理解不能なポケモンを一人一人持っていた

クーズ「そう言えばライバルのグリーンが出てこないな」

最初のグリーンさえ無視していた。いや逃げた

クーズ「よし。やっと来たな」

マサキの家に着いた

ポケモン？「！？助けてくれや。わいを助けてくれ」

クーズ「任せな。ここでマサキを助けてって！？」

通常はコラッタの見た目だが、ベトベターの見た目になっていた

クーズ「何これ、グロい。年齢対象無制限のこの小説はきついよ」

そして書けないので素早く装置に入れてマサキを直した

マサキ「いやゝ、ありがとな」

クーズ「・・・あなたは!？」

見た目がワタルだった

ワタル? 「いやいや、すまんゝ。最近整形して、ワタルの顔にしてみうたんや」

クーズ「(なんでしたったなんだ?) そうですかー。じゃあ助けたんでチケットを」

マサキ「チケットはジムリーダーのカスミに取られたんや」

クーズ「へ?」

マサキ「まあ、あれだ。可愛い女性には、はかいこうせん、は撃てないよ。みたいな」

クーズ「(船行けないな。カスミから取り返すしかない) じゃあ、また」

マサキ「あ! ちよ。まってなゝ」

ワタルの真似をしたがるマサキを無視してクーズはジムに急いだ

クーズ「ここがジムか?」

落書きばかりされている（夜露死苦みたいな感じ）

クーズ「嫌な。予感しかないが、行くしかない」

暴走族A「姉御、流石です！！水のプリンセスと言われ」

姉御？「ああ？違うでしょ。世界のプリンセスでしょ！！」

足で暴走族Aの背中をグリグリする

暴走族A「はあ、はあ。俺、幸せです」

そこには暴走族数人とカスミがいた

暴走族B「ん？誰だテメー！！」

クーズ「えつと・・・ジムの挑戦者です」

暴走族C「このカスミ様と戦いたいならリアルファイトで俺達を倒すんだな」

そして暴走族とカスミは爆笑する

クーズ「（なんだこいつら・・・）」

カスミ「まあ冗談はここまでよ。さあ来なさい！お姉さんがボコボコにして、あ・げ・る」

クーズ「ピチュー。今すぐ殺れ！！」

「ピチュー！」

カスミ「あらあら。怖い、怖い。ヒトデマン、美しく決めるわよ」

「ヘアッ！」

ステージは水がない普通のステージである

クーズ「ピチュー。十万ボルト！」

カスミ「（十万ボルト。ピチューのくせにやるわね）ヒトデマン。避けて、あやしいひかり」

「ヘアッ！」

ヒトデマンはジャンプしてよけピチューにあやしいひかりをする

クーズ「くつ、混乱か。ピチュー、でんじは」

「ピチュー？」

でんじはがクーズに向かって放たれる

カスミ「ハハハ。いい様ね。ヒトデマン、ハイドロポンプ！」

クーズ「ちつ、ピチュー。避ける！」

「ピチュー？」

クーズに突進してきた。だがハイドロポンプは避けた

クーズ「うげふ」

カスミ「フフ、終わりよ。これは避けられないでしょ？なみのり！」

どこからか波が来た

クーズ「ちくしょ。ピチュー、戻れ。カモネギ、そらをとぶ」

「・・・カモ」

クーズの手を掴みながら飛ぶ

「ヘアッ」

だが波で来たヒトデマンにクーズが当たった

カスミ「ちょっと！トレーナーがポケモンを攻撃しないでよ」

暴走族A「そうだ。テメー、殺されてえのか！」

クーズ「ヒトデマンが当たってきたんだろ！」

何故かポケモン勝負ではなく口喧嘩をしている

クーズ「カモネギ、つばめがえし！」

「カモ！」

素早い動きでヒトデマンに攻撃が当たる

カスミ「！！ヒトデマンが」

審判「ヒトデマン、戦闘不能」

クーズ「（いつからいた。審判よ）」

カモネギに落とされ綺麗に着地した

クーズ「よし、このままいけば」

カスミ「行きなさい。ドククラゲ！」

「ドク」

基本、鳴き声が分らないと最初の二文字を使う

クーズ「！！ドククラゲ。暴走族になると毒が必要か」

カスミ「ドククラゲ。あやしいひかり！」

クーズ「二度も同じ手は効かないぜ。カモネギ、こっすくいどつ」

「・・・カモ」

素早い動きでドククラゲの攻撃を全て避ける

カスミ「なかなか、やるわね。ドククラゲ、からみつく！」

ドククラゲの長い触手が何本も来てカモネギを捕まえた

クーズ「ちっ。カモネギ脱出しろ」

だがカモネギの力ではドククラゲからは逃れられない

クーズ「（カモネギを擬人化したら薄い本が作れそうだな）」

カスミ「ドククラゲ！しぼりとる」

ドククラゲの触手からカモネギの力が、しぼりとられていく

クーズ「（まずい！どうにかしないと）」

カスミ「このまま終わりね」

余裕なカスミ様を暴走族の部下達は誉める

クーズ「いや、まだだ。カモネギ！エアスラッシュ」

切るまでは、いかないがダメージを与えて脱出した

クーズ「かなり体力を持っていけたな」

カスミ「ドククラゲ！ようかいえき」

クーズ「カモネギ、避けてから、つばめがえし！」

「・・・カモ！！」

力を振り絞りドククラゲの攻撃を避けて、つばめがえし、を当てる

カスミ「なかなかやるわね」

審判「ドククラゲ、戦闘不能」

カスミ「じゃあ、私の最強のパートナーを紹介するわ。スターミー！」

「ヘアッ！」

カスミ「スターミー。ハイドロポンプ！」

クーズ「カモネギ。避ける！」

だがヒトデマンとは比にならないほど早く、避けられなかった

審判「カモネギ、戦闘不能」

クーズ「（なんだあれ。勝てるのかよ）」

ものがたりの付和雷同（後書き）

ツヤガ「果たしてライバルはいつ出てくるのだろうか」

クーズ「まあグリーンは強いから出なくていいよ」

ツヤガ「では書くことないので ノシ」

ものがたりのサイレント

クーズ「こうなったら。いけ！ドジョッチ」

「ドジョ」

カスミ「あらら。水、地面って相性、微妙ね。ピチューは出さないのかしら？」

クーズ「いや、お前のスターミーはドジョッチで充分だぜ」

カスミ「なめられたものね。スターミー、スピードスター！」

ゲーム中では必中技である

クーズ「ドジョッチ！みずのはどう」

「ドジョ」

スピードスターとぶつかるがドジョッチの方が強かった

カスミ「フッフ。スターミーに水をくれてありがとう」

威力が弱まっておりますスターミーは水タイプなので喰らわなかった

クーズ「ちっ、ドジョッチ。マグニチュード！」

マグニチュード8の攻撃がスターミーを襲う

カスミ「スターミー！避けて、ハイドロポンプ」

ハイドロポンプがドジョッチ目掛けて飛んできた

クーズ「よっしゃ。ドジョッチ！ハイドロポンプに、たきのぼり」

スターミーのハイドロポンプを登る。ドジョッチが鯉になった瞬間だった

カスミ「！？」

クーズ「よしいっけー！！」

たきのぼりがスターミーに当たる。そして下に落ちる

クーズ「まだだ。ドジョッチ、アクアテール！！」

「ドジョー！」

落ちたスターミーに空中からの落下スピードが付いたアクアテールがスターミーを襲う

カスミ「甘いわね。スターミー、サイコキネシス！！」

「ヘアッ！」

ドジョッチの体が超能力により浮いた

クーズ「（やばいな。どうするか）」

と、その時

「ピチュー!!」

勝手にボールから出てきたピチューが何かを伝えようとしている

クーズ「・・・任せろ。ピチュー!」

よく分からないがピチューの頭を撫でる

クーズ「(この状況・・・)」

そしてクーズは答えを出す

カスミ「スターミー。ドジョッチを叩き落とさない!」

クーズ「やらせないぜ!ドジョッチ。みずあそび」

超能力で、みずあそび、の水が浮いた

カスミ「何がしたいか知らないけど終わりよ!やりなさい、スターミー!」

「ヘアッ!」

ドジョッチが叩き落とされ煙が舞う

審判「ドジョッチ。戦闘不能」

クーズ「よし。ピチュー、終わらせてこい!」

ドジョッチをしまいピチューを出す

カスミ「フフフ。スターミー！あやしいひかり」

クーズ「ピチュー！十万ボルト」

しかし、あやしいひかりが先に当たる

カスミ「これでもう十万ボルトは当たらないわ！そしてポケモン交換も出来ない。私の勝ちね」

暴走族達がまたカスミを誉める

クーズ「それはどうかな？」

ピチューの放った十万ボルトは、サイコネシスで浮いている、みずあそび、に当たる

カスミ「まさか！？」

十万ボルトは拡散した

クーズ「やべ！トレーナーを計算に入れてなかった！！」

クーズはもちろんカスミや暴走族達も十万ボルトを喰らう

審判「スターミー。戦闘不能」

クーズ「なんで・・・審判は・・・無傷・・・」

バタッ

倒れたナチヤは最後の力を振り絞り、審判、と書いた

そして時間が過ぎ

謎の人物「HA〜H A H A！ワタル。華麗に参上！」

ジムの壁を突き破りカイリユーと共に入ってきた

ワタル「ん？そうか。私はマサキとかいう奴に会いに来たのか」

周りを見渡す

ワタル「ふむふむ。さっきの壁を壊したからかな」

審判は帰っていた。他は気絶している

ワタル「！！クーズ君じゃないか。・・・あれ？クズだっけか、まあいい」

ピチューと一緒に寝てるクーズを起こす

クーズ「んゝ・・・！？ワタルさん！」

ワタル「やあ。お目覚めかい？」

クーズ「・・・本物か」

ワタル「まさかマサキのことを知ってるのか？」

クーズ「えーと、はい。なんか整形してワタルさんの顔になってました」

ワタル「噂は本当のようだな。今すぐ殺りに行くか」

謎の人物「おっと。まちなはれ」

マントを靡かせて登場したマサキがきた

マサキ「別に行かんと、わいはここに居るで」

ワタル「話が早いな」

カスミ「・・・ん。あ！ダーリン」

クーズ「ダーリン・・・だど・・・」

マサキ「そうや。わいの彼女や」

まさかの事実

ワタル「ふっ、リア充か。爆発しろー！！！！いけ、カイリユー」

「ガオーン」

クーズ「鳴き声、変だな」

マサキ「ちょっと面白いことしようやないか。我がイーブイ家族軍団！いけー！！」

イーブイ、シャワーズ、サンダース、ブースターが出てきた

ワタル「クズ君、手伝ってくれるか？」

クーズ「勿論！よし、ピチュー、いけ！」

「ピチューー！！」

カスミ「じゃあ私はイーブイとサンダース借りるわ」

マサキ「よしじゃあバトルや！」

まさかの四対二の勝負

ワタル「カイリユー！ドラゴンクロー」

狙いはマサキだった

マサキ「ちょ！わいを狙うな。シャワーズ、なみのり！」

なみのりに乗ったシャワーズを掴みカイリユーの攻撃を避けた

マサキ「ブースター。おにび！」

ワタル「避けて、みずのはどう！」

ブースターの、おにび、を避け、みずのはどうを放つ

マサキ「シャワーズ！みずのはどう、に突っ込むんや！」

カイリユーの、みずのはどう、を喰らう。だが特性ちよすい、で水タイプの攻撃を喰らうと体力が回復する

ワタル「ちっ。長引きそうだな」

カスミ「さあて。第二ラウンドとしましょうか」

クーズ「いいぜ。俺のピチュー、ナメんなよ！」

ものがたりのサイレント（後書き）

ツヤガ「9月10日って、クーじゅう、クーじゅ、クーズになるからクーズの日にしよう」

クーズ「まあいいけど。何かするのか？」

ツヤガ「そうだね。番外編にしようか」

クーズ「やったぜ。楽しみだな」

ツヤガ「フフフ。どう料理しようか」

クーズ「なんか悪人顔だぞ・・・」

番外編から飛び出した

ツヤガ「やった。久々の番外編だ」

クーズ「本文に出ていいのか？」

ツヤガ「いいの、いいの。よし。何しようかな」

クーズ「考えてなかったのかよ・・・ていうか撮っ」

ツヤガ「いや」。数個考えてあるんだよね。1つは、ポケモンを喋らして色々。他は私とバトル。あとフラグの回収とか」

クーズ「・・・色々考えてたんだな」

ツヤガ「よし、じゃあ宣伝からいこう」

クーズ「いきなりだな」

ツヤガ「私の他の小説【今 ハンター達は】の応援よろしく」

クーズ「（こんな大胆な宣伝は、この小説くらいだろう・・・）」

ナチヤ「ということで登場！！」

クーズ「出るな！紛らわしいから出るな！」

ナチヤ「まあ主人公同士なんだからいいだろ？」

クーズ「いや、だって性格が・・・」

ツヤガ「うん。面倒なのとバラエティーが少ないから主人公と周りのキャラの性格は似てるよ」

ナチャ「皆さんも【今 ハンター達は】を見て確認してください」

クーズ「（もう帰りたい・・・）」

ツヤガ「まあ、今ハンは色んなキャラの練習してるから重要キャラだけ性格が似てるかな。じゃあ宣伝は、これまでにして」

そして周りが急に暗くなる

ツヤガ「皆さん、お待ちかね。9月10日、クーズの日、スペシャル回です」

スポットライトがツヤガに当たる

クーズ「おお」

ツヤガ「今回は【銀き冷気の力】をお送りします」

急にスクリーンが出てきた

クーズ「大変だったぜ」

ツヤガ「これはフィクションです。（小説と関係ない）設定的にはクーズが主人公の映画のような物だと思ってください」

子供「待つてゝ。待つてよゝ」

何か浮かんでる物体を追いかける子供

女性「あらあら。おおはしやぎね」

男性「そりゃ。この村の伝説的なポケモンだからな」

だがその時

ゴゴゴゴゴ

女性「！？雪崩」

男性「なに！？」

二人は必死に逃げる。だが雪崩のスピードには勝てない

子供「お母さん！お父さん！」

親の元に行こうとした子供

男性「馬鹿！来るんじゃない。俺たちは大丈夫だ。フリージオ、ク
ーズを頼む！」

フリージオは下に垂れている鎖でクーズを掴みに逃げた

クーズ「お父さん！！お母さん！！」

く現在く

ここはある雪が多く降る村。この村には特別なポケモンが住んでい
ると言われる

クーズ「あゝ。雪が止まないな」

今、季節は冬である。冬でこの村では雪が止むことは少ない

クーズ「しかし、毎日毎日疲れるな」

雪かきをしている。やらないと道が無くなる

「ピチュー！」

雪かきをしているクーズにあるポケモンが近付いてきた

クーズ「よお。今日も来たか」

このピチューは、たまに来るポケモンである

クーズ「ちょうど良かった。ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

十万ボルトで雪をぶっ飛ばす

クーズ「よし、雪かき終わり」

そして木の家に入る

クーズ「寒いって。はやく薪、薪」

え、薪に火を付けた

クーズ「ピチュー、寒いだろ？はい、プレゼント」

真っ赤なマフラーをピチューの首に巻く

「ピチュー！」

喜んでいようだ

クーズ「良かった。昨日頑張って作ったんだぜ」

そして暖かくなった部屋でピチューと遊ぶ。ちなみに撫でたりすると蹴られる

クーズ「腹減ったな。昼飯作るか」

昼飯を作るために厨房に行く。しかし、この時誰も知らない。強大な敵が近付いていることを

クーズ「ふう。お腹いっぱいだな」

昼飯を食べて満足なクーズとピチュー。その時

ドーン

クーズ「！？なんだ、この音は」

急いで外にでる。村長の家あたりから煙が出ている

クーズ「嫌な予感しかしないな。ピチュー行くぞ」

「ピチュー！」

クーズの肩に乗り、赤いマフラーを靡かせながら行く

村長「・・・お前は」

謎の人物「よお。腐れ親父」

村長を親父と言った少年は髪の毛が銀髪で逆立っている。ドクロな
どが模様の服や不吉なアクセサリーを着けている

村長「お前は、もうこの村と関係ないはずじゃ」

謎の人物「ざんねん。俺の入ってる組織から命令されてね」

村長「命令じゃと？」

謎の人物「ああ。この村に住んでいる、イッシュ地方でしか見られないポケモン。フリージオを捕まえにな！」

少しの間、村長は何かを思い出すように止まった

村長「あれは村の神様のような物。ナチャ、お前なんぞに渡すものか。いけ、マンムー」

ナチャ「ヒヤハハハ。雑魚がほづくな。殺れ、ブーバーン！」

2体のモンスターが対決する

クーズ「くそ。何度か爆発が起こってるな」

必死に村長の家に行こうとしてるが、なかなか着かない

村長「くっ・・・」

ナチャ「どうしたジジイ？もう終わりか？」

ブーバーン、一匹で村長の手持ちを全て倒した

ナチャ「んじゃ、終わりだな。死ね」

ブーバーンの腕が村長に向けられる

謎の人物「待てー！！！！」

ナチヤ「ん？まあいい。ブーバーン、かえんほうしゃ」

かえんほうしゃをするために腕から火が漏れる

謎の人物「やろー！ピチュー、十万ボルト」

「ピチュー！」

ナチヤ「ブーバーン。避ける」

直ぐ様、避け体勢を立て直す

クーズ「テメー。誰だ！？」

見た目から不良である

ナチヤ「・・・お前、クーズか」

クーズ「・・・もしかして、ナチヤか？」

ナチヤ「ああ」

クーズ「良かった。で、爆発は何だったんだ？」

ナチヤ「ククク」

笑いをこらえてるが無理だった

ナチャ「ハーハハハハ！馬鹿だな！クズ。俺が全部やったんだよ」

クーズ「なっ！？」

ナチャ「俺はあの頃の俺じゃない。もう誰にも邪魔させない！」

クーズ「・・・」

村長「クーズ」

村長がいつもより老けて見える

ナチャ「おいおい。まさか話してないのかよ。ありえねえな」

クーズ「村長・・・？」

村長「いつか話さなくてはと思っていたのじゃ。これは天気が快晴のある日のことじゃ」

番外編から飛び出した（後書き）

ツヤガ「もう普通にこの設定でポケモンが書きたかった」

クーズ「そんなこと言うなよ。他のキャラが寂しくなるだろ」

ツヤガ「そういえば都合上ナチヤを出しました」

クーズ「まあキャラが全然違うけどね」

ツヤガ「いや皆、設定では映画を撮っている設定なので、あのキャラはナチヤが作ったキャラになりますね」

クーズ「紛らわしい」

ツヤガ「あーちなみに本文にナチヤが出たのは、このためだよ。ただの宣伝じゃなかったんだよ」

クーズ「ああ、書いた後に思い付いた、ということが文章で分かるぞ」

ツヤガ「色々大変なんだよ。小説、書くのめさ」

番外編から四苦八苦

これは天気が快晴の日。今、村長とナチヤはある場所にいる

村長「ナチヤよ。お前も知ってると思うがこの村は地球の中心部にある」

ナチヤ「ああ。だから強いエネルギーがあると反応して天変地異が起こるんだろ」

村長「そうじゃ。・・・だから」

ナチヤ「・・・？」

村長「すまないな」

いきなりマンムーでナチヤを踏み潰そうとした

ナチヤ「（山に登ったのは、このためか）・・・まあ分かってたことだ」

マンムーの攻撃を避ける

村長「お前が生きていると、いつか世界が破滅する！それを知ってるだろ」

ナチヤ「だからって自分の息子を殺すのかよ・・・。いけ、ブーバー！！」

「ブーバー！」

村長「・・・やるしかないか」

二人の激しい争いが山で起きる

クーズ「までー！！」

今、クーズはフリージオを追いかけている

父親「フリージオも何かを感じてここに来たのかな？」

母親「さあ？でも村の守り神よ。追い出せないでしょ」

父親「追い出す気はないよ。でも不思議でさ」

村長「終わりじゃな」

ブーバーはやられている

村長「・・・本当にすまん」

マンムーの大きな足がナチヤに降り下ろされる

ナチヤ「（死にたくない！！！！）」

ナチャはまた避ける

村長「無駄じゃ！」

だがその時

ゴゴゴゴゴゴ

ナチャ「（雪崩！？よし逃げるチャンスだ）ブーバー、お願いだ。
かえんほうしゃー！！」

村長に向かって、かえんほうしゃが放たれる

村長「くっ。逃げられたか」

マンムーでガードしたが居なくなっていた

村長「わしも逃げないと危ないな」

そして雪崩はそのままクーズの両親を襲う

クーズ「お父さん！！お母さん！！」

ナチャ「まあ、そんな訳でクーズの両親を殺したのはこのジジイだ」

正確に言うとナチャも関係するが気にしない

クーズ「……」

村長「……クーズ」

ナチャ「ヒヤハハハハ。信頼してた奴が両親を殺して未だに話してなかった。楽しいな！」

しゃべり方は鬼柳を参考にしてください

クーズ「……確かに村長は俺の両親を殺したかもしれない」

ナチャ「かも、じゃねえ。殺したんだよ」

クーズ「だが今まで困ったことが助けてくれた。俺の両親の代わりをしてくれた。村長は充分に罪を償った!!」

ナチャ「ああ？それがどうした？殺したことには変わんねえよ」

クーズ「俺はお前のように自分の罪を認めないような奴の方が許せない！勝負だ、ナチャ!!」

ナチャ「はゝあん。まあ、そんな考えじゃ無意味なんだよ。いけ、ブーバーン」

「ブーバー」

クーズ「いけ！ピチュー」

「ピチュー！」

ナチャ「燃え尽きな。ブーバーン、かえんほうしゃ！」

ターゲットのピチューに腕を向ける

クーズ「ピチュー。十万ボルト！」

かえんほうしゃと十万ボルトがぶつかり大きな音と煙が発生する

クーズ「さらに十万ボルト！！」

ナチャ「ブーバーン。避ける」

煙の中から出てきた十万ボルトを避ける

ナチャ「ブーバーン、サイコキネシス！！」

ピチューの体が宙に浮く

クーズ「くっ」

ナチャ「どうした？何もしないなら殺るだけだ」

ブーバーンの腕がピチューに向けられる

クーズ「やらせるか！！ピチュー。かえんほうしゃと自分に、でんじは！」

ブーバーンの放たれた、かえんほうしゃはピチューの反発避けにより避けられる

ナチャ「面白いな。だがお前の勝ちはない」

クーズ「（確かに。ピチューじゃ無理か）」

「ピチュピチュ！」

何か怒っているような感じだ

クーズ「・・・そうだな。よしピチュー。でんこうせっか」

左右に素早い動きをしながらブーバーンに近づく

ナチャ「ハハハ！ブーバーン、ふんえん！！」

ブーバーンの肩などから火が勢い良く飛び出る

ナチャ「なに！？」

高速で移動しているピチューがブーバーンの攻撃を避けている

クーズ「流石！！ピチュー、十万ボルト！」

「ピイチュー！！！」

ギリギリまで近づき十万ボルトをブーバーンに当てる

ナチャ「ちっ。ブーバーン、えんまく！（あのピチュー。普通じゃねえな）」

「ブーバー」

えんまくにより周りが見えなくなる

クーズ「（どうするか）」

だが考える余裕は無かった。黒煙からブーバーンが飛び出してきた

ナチャ「ブーバーン、かみなりパンチ」

クーズ「！？ピチュー、避ける」

「ピチュー！」

「ブーバー！」

攻撃より回避の方が少し早かった。ピチューはジャンプして避ける

ナチャ「まだまだ！左手ではのおのパンチ！」

クーズ「ピチュー、でんじは！」

反発によりピチューは更に高く宙に浮く

ナチャ「ハハハハ。ブーバーン、ほのおのパンチの威力を乗せて、かえんほうしゃ——！」

ほのおのパンチの火をかえんほうしゃに混ぜる

クーズ「っ！？威力が」

とてもピチューじゃ太刀打ちできない威力のかえんほうしゃがピチューを襲う

ナチャ「空中じゃ身動きが取れねえし、技を撃った直後だから隙だらけだぜ」

クーズの手持ちはピチューしかない。ピチューが負ければクーズも負けになる

ナチャ「終わりだ！！燃えちまいな！！！」

ピチューがかえんほうしゃに当たる寸前

「ピロリロ（機械的な音）」

ナチャ&クーズ「！？」

れいとうビームがブーバーンのかえんほうしゃを相殺した

ナチャ「あいつは・・・」

クーズ「助けに来てくれたのかフリージオ！」

そこには村の守り神であるフリージオがいた

番外編から四苦八苦（後書き）

ツヤガ「ふ〜。だいぶ更新が遅れましたね」

クーズ「なんでだ？」

ツヤガ「言い訳になりますが、忙しいと他のゲームをしてたりと・・・」

クーズ「毎日少しでいいから書けよ・・・」

ツヤガ「いや、だって。ね〜」

クーズ「分からないからな」

ツヤガ「ちえ、んじゃ今回の話を。ブーバーンの鳴き声が個人的に読んで笑いました。そしてフリージオの鳴き声は・・・」

クーズ「まあ、アニメ見てないから鳴き声は難しいと思うぜ」

ツヤガ「気にしたら負けでいいですね。次回も番外編です」

番外編から床暖房

それは結晶。それは冬。それは化身。それは・・・

クーズ「フリージオ！来てくれたのか」

「ピロリロ」

クーズの顔にスリスリしてくるが冷たい

クーズ「（冷て！）フリージオ。分かったから、今バトル中」

親切にナチャは待っていた

ナチャ「まだか？」

こちらはブーバーンの熱を使い温まっていた

クーズ「ずるっ！てか、ピチューも」

ピチューも寒かったのか温まっていた

ナチャ「おし、んじゃ。仕切り直しだ！」

両者位置につく

ナチャ「そうだな。テメーにチャンスをやろう。フリージオとピチ

ユー。二匹使え」

クーズ「・・・分かった。だが、そしたら負けないぜ」

ナチャ「出来るもんならやってみな！！ブーバーン、かえんほうしや」

ピチューを狙って、かえんほうしやが放たれる

クーズ「フリーズオ。れいとうビーム！ピチュー、十万ボルト！」

技マシンの汎用技がバンバン出てきます

ピチューの十万ボルトはかえんほうしやを相殺、隙ができたブーバーンにれいとうビームが迫る

ナチャ「ブーバーン。ふんえん！！」

至るところから炎が飛び出る。そしてれいとうビームを相殺し、ピチュー達に攻撃をする

クーズ「技と技のぶつかり合いか。ピチュー、十万ボルトで打ち消せ！」

ふんえんの炎を、また相殺する

クーズ「フリーズオ。ブーバーンにきりさく！」

特殊型のフリーズオには、これをしてはいけない（本家のゲーム）

ナチャ「死にに來たか！ブーバーン。ほのおのパンチ」

ブーバーンの腕が炎に包まれフリージオを殴る

だが手応えが無かった

ナチャ「！？消えた」

クーズ「フリージオ。れいとうビーム！！」

いきなりブーバーンの後ろにフリージオが現れる

ナチャ「なに！？」

ブーバーンは反応出來ず、れいとうビームを喰らう

クーズ「フリージオは氷の結晶だぜ」

説明しよう！フリージオは設定で熱すぎると水蒸氣になる能力（？）
を持っている

ナチャ「なるほどな」

「ピチュ〜」

二人とも納得したようだ

クーズ「フリージオ！そのまま、れいとうビームで決めろ！」

から空きのブーバーンに、れいとうビームが襲う

ナチャ「甘い、甘い。ブーバーン、ふんえん」

れいとうビームをかき消し、フリージオの回りに、ふんえんが舞う

ナチャ「水蒸気のままじゃ自由自在には動けないだろ？」

ふんえんの檻にフリージオは捕まる

クーズ「ちつ。ピチュー、十万ボルト！」

ナチャ「そろそろ。お遊びは終わりだ！！ブーバーン、だいもんじ
！」

かえんほうしゃの比にならない威力のだいもんじがピチューを襲う

ナチャ「ハハハハ。苦しみ……そして死んでいけ！！」

急に空が明るくなる。だが急に気温も高くなる

村長「不味い。ナチャの力に地球のエネルギーが反応した！」

クーズ「くつ。雪の状態から、いつきに日照りかよ」

ナチャ「こりゃ好都合だな。ブーバーン、止めの一撃をお見舞いしてやれ」

「ブーバー」

だいもんじを喰らって動けないピチューにゼロ距離のかえんほうし

やが放たれようとしている

フリージオは日照りによる気温上昇とブーバーンの炎で固体に戻れない

「ピッ・・・チュ」

ナチャ「まあ、普通のピチューより強かったぜ。楽に逝きな」

しかしピチューには必ず守ってくれる王子様がいる

クーズ「やらせるかー!!」

ブーバーンの元にダッシュする

ナチャ「おいおい。何言っちゃってんの？ブーバーン、やれ」

クーズ「!？」

終わりが近いと時は早く進むか遅く進むか、両極端しかない

中間なんて存在しない。今回も例外ではない。時は遅く進む

（ピチューが殺られる。どうにかして助けないと・・・。だが俺には力がない、ピチューを助けられる力が・・・ない）

村長「こ・・・これは!？」

天氣がまた変化する

ナチャ「クーズの力に反応したか!？」

天氣は一転し、あられ状態になる

クーズ「・・・フリージオ!こおりのつぶて」

小さな氷は素早くブーバーンを襲う。怯んだ所でピチューを奪還した

ナチャ「ちつ。だが天氣でどうにかなると思うなよ。ブーバーン、一撃だ。一撃で終わらせる!オーバーヒート!!!」

これまでにない炎がブーバーンから迸る

ナチャ「・・・この世の万物を凍らせる冷氣!フリージオ、ぜったいれいど!!!」

「ブーバー!」

「ピロリロ!」

紅蓮の炎と蒼霞の氷がぶつかり合う

ナチャ「くっそ・・・」

フリージオのぜったいれいどがブーバーンのオーバーヒート呑み込みブーバーンを凍らせる

クーズ「勝ったんだよな」

自分の家でボーッとしている

そこには氷の結晶とツンデレな雷がいる

あの戦いに勝利したクーズ。だがまだ解けてない謎はある

クーズ「この手の話はさ。終わらせ方が分からないよな」

「ピチュ」「ピロリロ」

番外編から床暖房（後書き）

ツヤガ「2ヶ月投稿してませんでしたね〜。色々やりたいことがあるので早く投稿出来ません

そこは謝ります。あと今日投稿したのは誰かさんが投稿したのを、
たまたま見たからです

では ノシ」

ものがたりの美

今、カスミとクーズ。マサキとワタルでバトルをしている

相手は2体。こっちは1体だが・・・

クーズ「（サンダースには電気技が効かない）なら修行の成果を見せる時が来たようだな！」

「ピチュ！」

ピチューは赤い鉢巻きを頭に巻く

カスミ「そんな装飾品付けたって無駄よ。サンダース、めざめるパワー。イーブイ、すなかけ」

タイプが分からない、めざめるパワーに、すなかけがピチューを襲う

クーズ「師匠の教わったことを実践するときだ。ピチュー、避ける！」

ピチューは目を瞑る

師匠「目で感じるのではない！第六感、心の目で感じるのだ！」

カスミ「!？」

大量のめざめるパワーと、すなかけがピチューを襲うが上手くかわす

クーズ「師匠の教わったことは無駄じゃなかったんだな」

「これは洞窟を抜けてすぐ」

謎の人物「おい！待つんだ。その少年」

クーズに話しかけてきたのは柔道着を来ている、からておうだ

クーズ「？たしかファイヤーレッドだと技を教えてくれるんだっけ」

メガトンパンチとメガトンキックを教えてくれる（二人だが）けっ
こう無駄な技、教えの人です

からておう「そんなのはどうでもいい。それより、そのピチュー。
そいつは私の予想ではかなり伸びる」

クーズ「え？背が!」

「ピチュー」

ピチューは自分が背が高くなった時をイメージしている

からておう「ちがーう!!力が強くなるということだ!」

クーズ「ですよね」

からておう「どうだ？ちょっと一緒に修行してみないか？」

クーズとピチューは目を合わせる

クーズ「まあ急ぎ旅じゃないので、いいですよ」

その日からクーズと、からておう（師匠）との修行の日々が始まった
ある時は泣いたり。ある時は苦しんだり。ある時は不味くて吐きそ
うだったり

覚えているのは食事のことぐらいだ

そして長い師匠との修行が終わった

クーズ「この三日間。一年間に感じた・・・」

食事が相当不味かったらしく死にそうである

師匠「ふむ。もう教えることはないな。よしクーズよ。お前のピチ
ューは一回りも二回りも強くなった」

「ピチュー？」

見た目は全く変わっていない

師匠「これを持っていけ」

師匠のハチマキを貰った

クーズ「これは？」

師匠「お前と私の修行をいつでも思い出すためだ」

クーズ「・・・師匠。ありがとな！」

クーズ「あの食事。今、思い出しても吐き気がする・・・」

だがピチューは確かに強くなっている

カスミ「何が修行よ。サンダース、でんこうせっか」

クーズ「やってやれ。ピチュー、マッハパンチ！」

格闘小説になりそうな予感がする

ピチューのマッハパンチがサンダースに直撃する

でんこうせっかの威力もあって、かなりのダメージだ

カスミ「！？なら、イーブイ。だましうち」

ピチューに攻撃をするフェイントし攻撃する

クーズ「ピチュー、カウンター」

イーブイの攻撃に反応してピチューはカウンターを放つ。そしてイーブイは吹っ飛ぶ

カスミ「何よ、あのピチュー。物理技が全然効かない」

クーズ「よし、止めだ。ピチュー、十万ボルト！」

イーブイに放たれる

カスミ「・・・！？まだ勝ち目はある。サンダース、イーブイを守って」

サンダースの素早さは異常だ。イーブイを守るため十万ボルトを受ける

クーズ「くっ。ちくでんか」

カスミ「見せてあげるわ。イーブイのとおきおきの技を！イーブイ、とおきおき！」

駄洒落っぽい言葉を言いながら攻撃する

クーズ「ピチュー、避ける！」

また目を瞑る

カスミ「させないわ。サンダース、十万ボルト」

ピチューはとおきおきの技に集中してたため十万ボルトを喰らう。

そして集中力がきれた

クーズ「!?!ピチュー」

イーブイのとおきがおきが直撃する

「ピチュー」

カスミ「集中してないと避けられないようね。さらに集中できるのは1つの技だけ」

クーズ「（完全に攻略されたな。どうする）」

ピチューは辛うじて立つ

カスミ「終わりよ。イーブイ、とおき。サンダース、十万ボルト」

「ブイ!」「サンダー!」

二匹の技が放たれようとした時

ワタル「カイリユー。はかいこうせん」

カスミ「!?!」

ワタルのカイリユーの、はかいこうせんで二匹は一気に戦闘不能になる

ワタル「遅くなってしまったな。クズ君、後始末は僕がやるよ。だ

から君は出ていいよ」

クーズ「いや、でも」

ワタルはマサキを抱えていたがマサキは原型を止めてない

クーズ「（ああ、やばいな）わかりました」

そしてピチューを連れて急遽ジムを出た

クーズ「あ！バッチ」

確認したらいつの間にか手に入れている

クーズ「ホント、このゲーム。よく分からないよな」

そしてクーズはポケモンセンターに行き、次の町に行くのを備えた

ものがたりの美（後書き）

ツヤガ「ふう。疲れました。気分で投稿するので次はいつになるかな」

クーズ「ていうかピチューを強化しすぎじゃないか？」

ツヤガ「大丈夫です。ドジョッチと一緒に重要な時でしか補正は効かないから」

クーズ「・・・それならいいけど」

ものがたりの独裁

2つのバッチを手に入れたクーズ。クリアしたら一体何が起こるのだろうか

クーズ「ドジョッチ。みずのはどう!」

トレーナー（男）「僕のマグマラシが」

最後のトレーナーを倒しクチバシティに着いた

クーズ「どうするか。自転車を先に入手するか。もう船に行こうか」

クーズが悩んでいると

ドンッ

当たった人「すいません」

クーズ「ああ、大丈夫ですよ」

当たった人は顔を隠すようにフードを深く被っている

クーズ「?。よし決めた。自転車を先に行こう」

「ポケモン大好きクラブ」

男「わいのピッピは最高やわ」

女「うちのラルトスが最高よね」

男「いやピッピや!」

女「ラルトスよ!」

低脳な喧嘩が始まっているが皆、気にしていない

大好きクラブの会長「おや? 君は家のクラブに入りたい人かね?」

クーズ「いや。違うんですけど」

会長「じゃあ、私の話を聞きに来た人かい。しょうがない私が愛してやまないポケモン達の話しよう。まず話すポケモンはエレキブルだ。家のエレキブルはニックネームが、エコですう、という面白い名前なんだが、こいつが三色パンチとクロスチョップを覚えていてな。確かに個体値は考えてないが努力値は、しっかり振ってある。意外と大体のポケモンに対して対処できるから対策を練っていない相手なら、そこそこ戦えるのだよ。次はピカチュウの話だ。家のピカチュウは配信ピカチュウで技を1つも変えていないんだ。だから技がDP時代のサトシのピカチュウと一緒にんだ。でんこうせっか、十万ボルト、アイアンテール、ボルテッカー。正直、あんまり使えないが攻撃と素早さはVにしてあるぞ。持ち物はでんき玉で、相手に抜かれると一撃で乙る可愛いやつじゃ。そして・・・」

〜一時間後〜

会長「おや。もうこんな時間か。悪いの長話をしてしまつて」

クーズ「あ、はい。大丈夫です（マシंगाントークすぎるぞ）」

会長「聞いてくれたお礼をしなくてはな」

ひきかえけんを貰つた

クーズ「ありがとうございます」

そして直ぐにハナダで自転車を貰つてきた。そして今、船に乗る所だ

船員「よし、いいぞ。入れ」

クーズは押されるように入つた

クーズ「さあて船長に会いに行くか」

船長に会いに行くために階段を上る。だが少し外が騒がしい

クーズ「なんだろ？」

司会者「レディースエンドジェントルメン。皆、今日は盛り上がつてこうねー！」

人々「わー！ー！」

クーズ「・・・なんだこれ？」

司会者「もう一度言うけど、この大会のルール説明だ。タッグによるダブルバトルだ。ぼっちじゃ参加出来ないから、気を付けろ！参加チームは無制限どんどん参加してくれー！」

クーズ「大会か。優勝したらマスターボールとかなら参加するんだけどな」

司会者「優勝者にはマスターボールが送られるぞ。頑張っていこうー！！」

その瞬間、クーズは動く。目で見えない素早い行動で隣にいた人を無理矢理連れて参加申し込みをした

そして事後

クーズ「すいません。いや、賞品がマスターボールだったもので」

隣の人「あら？私の熱烈なファンだと思ったら、違うのね」

クーズ「！？あ、あなたは」

水色のロングヘアーに大人らしい服装。ポケモンバトルは、かなりの強敵

クーズ「（カ、カリンさんだー！！）」

カリン「何、驚いてるのよ」

説明しよう！カリンは金銀に出てくる四天王の1人で、あくタイプを使う。HGSSの強化版のブラッキーは本気で耐久が鬼畜だ

クーズ「いいいい、いや何で貴方が!？」

カリン「私がここに居たらいけない理由があるかしら？」

クーズ「ないですけど」

カリン「じゃあいじやない。それ以上の深追いは駄目よ」

クーズ「分かりました!」

作者がカリンを好きなので優遇されてます

謎の人物「おゝい。カリンさん」

カリン「あら?連れが来たわね」

クーズ「連れ?」

イツキ「急に行かないで下さいよ」

クーズ「なんだ。イツキか」

イツキ「なんだ、って。君!僕は四天王の1人、イツキだぞ」

クーズ「いやだって最初じゃん」

グサツ。心に矢が刺さったようだ

イツキ「でも四天王は四天王だから」

クーズ「H G S Sで強化されても弱かったよね」

グサツ。またまた矢が刺さった

イツキ「き・・み・・言葉は選ぼうね」

クーズ「実際、経験値稼ぎにしかないよね。あとネイティオの鳴き声が聞けるくらいか」

グサツ、グサツ。もう心に矢が沢山。そしてイツキは落ち込んだ

イツキ「・・・どうせ僕なんて雑魚で四天王じゃなくてもいい存在なんだ」

カリン「あら。イツキが落ち込んだわね」

クーズ「メンタル面が弱いのに、よく四天王をやれるな・・・」

カリン「まあいいわ。イツキと参加するつもりだったけど、クーズ君と参加するから丁度いいわね」

全くイツキを励ます気がない

司会者「そろそろ締め切りの時間だー！ではもう締め切るぞ。・・・今、締め切ったー！ではサントアンヌ号タッグ大会、始めるぞー！」

人々「オオー！！」

クーズ「オォー！」

カリン「ワー！。フフフ」

イツキ「僕なんて、僕なんて、僕なんて」

これから船の上で生死を掛けた壮絶な戦いが始まるとは誰も知らなかった

ものがたりの独裁（後書き）

ツヤガ「気分が乗ってる時に投稿しないとね。またやる気無くすから」

クーズ「まさかのカリンさんが出てきたな」

ツヤガ「イツキはよくキャラが分からなかったからテキストにしましたね。あとこの前「バツジ」を「バツチ」って書いてたかも」

クーズ「確認しろよ」

ツヤガ「面倒だし、そこはスルーしてくれると信じているから」

クーズ「生死を掛けた戦い。どんな状況になるのやら」

ツヤガ「うゝん。勢いで書いたから上手く、まとまらないと思うよ」

クーズ「・・・」

ものがたりの焼き餅

司会者「さあ。順調に勝ち進み、準決勝まで来たのは、この四チームだ！」

四チームの名前が出る

司会者「前回の優勝者。パパとママの愛は無限回路！ラブラブカッブルだー！」

パパ「今年もママとの愛を爆発させます！」

ママ「もうパパったら」

司会者「ヒュー、ヒュー。ラブラブ！」

クーズ「（司会者が仰ぐなよ）」

司会者「次のチームは今大会初出場。夢は地球侵略！？イタイ二人の登場だー！」

イタイ二人の1人（男）「うー。僕は出たくないって言ったのに・・」

イタイ二人の1人（女）「いいじゃない。他の二人には頼めないし」

司会者「さあて次は。船には俺たちが居ないと駄目だろ？船員の二人だー！」

船員A「ようやく、ここまで、これなんだな」

船員B「ポケモンを育てたかいが合ったぜ」

司会者「おゝっと。既に二人は泣いているぞ」

クーズ「次は俺達か」

カリン「そうね」

司会者「主人公と四天王の最強コンビ！？グズとカリン様だー！」

クーズ「え？ちょ。呼び名の差が酷くない」

カリン「そう？フッフ」

カリンの裏がちよつと見えた瞬間だった

司会者「組み合わせはカップルとイタイ二人。船員とカリン様だー！一度に2つのバトルをするぞ。両方見逃すな」

人々「オオーー！！」

カリン「即効で終わらせるわよ。クーズ君」

クーズ「分かってます！」

審判「両者。前へ」

カリン「いくわよ。いきなさい、ヘルガー」

クーズ「よし、いってこい、カモネギ」

「ヘル!」「・・・カモ」

船員A「毎日荷物運びで鍛えた筋肉を見せるんだ。ゴーリキー」

船員B「こいつへの愛なら負けない。いけ、ゴマゾウ」

フィールドにヘルガー、カモネギ、ゴーリキー、ゴマゾウが並んだ

審判「試合開始」

クーズ「先手必勝!カモネギ、こうそくいどう、からの、いあいぎり」

こうそくいどうの威力が乗ったあいぎりがゴーリキーを襲う

船員B「ゴマゾウ。ゴーリキーを守るんだ」

カモネギの攻撃をゴマゾウが守る

船員A「ゴーリキー。クロスチョップ」

がら空きのカモネギにゴーリキーの攻撃が襲う

カリン「させないわ。ヘルガー、ふいうち」

いつの間にかゴリキーの後ろに居たヘルガーのふいうちがゴリキーに当たる

船員A「ぬうう。B、一度体勢を建て直すぞ」

船員達は体勢を建て直した

司会者「おーっと！こちらは一撃で試合が決まっちゃったー！」

クーズ「！？いくらなんでも早くないか」

イタイ人（男）「もう知りませんよ。ホント」

イタイ人（女）「いいのよ！どうせ何でもアリなんだから」

司会者「圧倒的な強さを見せたイタイ組。これは決勝戦が楽しみだー！」

クーズ「（どんなポケモンを使ったんだ？）いや、今はこっちに集中しよう」

船員A「ゴリキー、しんくうは」

ヘルガーをしんくうはが襲う

カリン「かくとうタイプだから、効果は抜群ね。じゃあ、ヘルガー。ほえるー！」

ゴリキーはヘルガーのほえるで怯む

クーズ「！？しんくうはが」

しんくうはがヘルガーに当たる。しかし怯まずゴリキーに突っ込む

カリン「ヘルガー。かみつく」

船員B「やらせるか。ゴマゾウ。ころがる」

クーズ「カモネギ。つばめがえし！」

ゴマゾウとカモネギの力は同等である。そしてゴリキーにヘルガーのかみつくが当たる

カリン「フッフ。ヘルガー、かえんほうしゃ！」

船員A「！？」

ゼロ距離のかえんほうしゃがゴリキーを焼き尽くす。だがヘルガーにもかえんほうしゃの炎が当たる

カリン「ヘルガーの特性はもらいび。さっきのかえんほうしゃの炎を受け、ほのおタイプの威力が上がるわ」

クーズ「（鬼だ・・・）」

カリン「ヘルガー。かえんほうしゃ！」

船員B「ゴマゾーウ！」

審判「ゴリキー、ゴマゾウ。戦闘不能。よって勝者カリン様」

司会者「こちらで決まったー！！圧倒的な力を見せた2チーム。果たして今回の大会を優勝するのは、どっちだ！？」

クーズ「俺の出番ありませんね」

カリン「いや、次の相手は相当な曲者よ。しっかり頑張ってね」

次の対戦チームを睨む

イタイ男「み、見られてる」

イタイ女「何、ビビってんのよ。男でしょ！もっとシャキッとしなさい」

イタイ男「で、でも。変にシャキッとしてると怖い人に絡まれたりするから」

イタイ女「はあ。ホント、ろくな男が居ないわね」

司会者「さあで、いよいよ。決勝戦の開幕だー！両者、ステージに出てきた！」

審判「両者。前へ」

カリン「そうだね。戦う前に聞いておくけど名前は何かしら？」

イタイ男「は、はい。僕はキイニって言います。デフェー！いて」

イタイ女がキイニの頭を軽く殴った

イタイ女「何、変なことまで言ってるのよ。．．私はマナカよ」

クーズ「（さっきキイニが言いかけた言葉。どこかで）」

カリン「そう。悪いわね時間とらせちゃって。いきなさい、ブラッキー」

キイニ「頑張って、テッカニン」

クーズ「よし。いってこい、ドジョッチ」

マナカ「見せてあげる。いけ、エルレイド」

司会者「さあ。試合が始まるうとしているぞ！」

審判「試合．．開始ッ！」

ものがたりの焼き餅（後書き）

ツヤガ「意外と戦闘が少ないですね。もっと増やしていきたいです。そして今一番悩んでいるのは、ポケモンを増やすのと、ドジヨッチの進化する場所ですね」

クーズ「ドジヨッチの進化はナマズンだな」

ツヤガ「いつ進化させようか。そもそも、ずっと使うのか。サトシのバタフリーみたいに【バイバイナマズン】とかで別れを作るべきか」

クーズ「え？伝説を作ってきたドジヨッチをスタメン落ちにさせるのかよ！？」

ツヤガ「微妙ですね。覚醒タイミングを早くし過ぎたから調整しないと、いけないし」

クーズ「そこらへんは作者の技量で、どうにか」

ツヤガ「あるわけないでしょ」

クーズ「ですよー」

ものがたりの花嫁修業

謎の人物「ちつ、あいつら。自分勝手に」

今、決勝戦が始まった

マナカ「エルレイド、サイコカッター！」

いきなりドジョッチを狙いにきた

キイニ「テツカニン。こうそくいどう」

クーズ「（テツカニンは後々、面倒になるな）ドジョッチ。避けて、みずのはどう！」

ヌメヌメの力を使い避けてエルレイドにみずのはどうを放つ

マナカ「向かい撃て！」

まさかの技を使わずにみずのはどうを打ち消す

カリン「あらあら、ブラッキー。だましうち」

エルレイドの背後からブラッキーが襲う

だが、あまりダメージは無いようだ

マナカ「キイニ。まだ？」

明らかに不機嫌そうだ

キイニ「待つてよ。テッカニンだって頑張ってるんだから」

クーズ「ドジョッチ。テッカニンにどろあそび！」

テッカニンは泥を浴び、遅くなる

マナカ「ちっ、うざいわね。エルレイド、ブラッキーに、かわらわり！」

カリン「そのまま受けて、しっぺがえし！」

エルレイドの強烈な一撃がブラッキーに当たるが耐久力は並みじゃない

そのままブラッキーのしっぺがえしがエルレイドを襲う

カリン「しっぺがえしは技を受けた後に使つと威力が上がるわ」

威力が上がった、しっぺがえしはエルレイドを吹っ飛ばす

キイニ「テッカニン。きりさく」

「ドジョー」

クーズ「！？ドジョッチ」

一瞬だった。こうそくいどうと自身の特性、かそくで最速になった
テッカニン。その、きりさくはまず見えない

マナカ「100m走したら一番遅そうなのにポケモンは素早いと言
われるほどね」

キイニ「ちょっと。変な肩書き付けないで下さいよ」

カリン「・・・ブラッキー。エルレイドにふいうち」

立ち上がったばかりのエルレイドを狙う

マナカ「そろそろ力、出してもいいわね。エルレイド、クロスチョ
ップ！」

突然、エルレイドの動きが早くなる。そしてブラッキーは攻撃を喰
らい、吹っ飛ぶ

カリン「くつ。今までは、お遊びだったってことね」

マナカ「そうよ。終わりにしてあげる。エルレイド、クロスチョッ
プ！」

キイニ「テッカニン。シザークロス」

ダブルなクロスがブラッキーを襲う

カリン「（流石にキツいかもね）」

ピンチの時に泥沼の覇者は覚醒する

クーズ「ドジョッチ！だくりゅう！」

ブラッキーの前を泥を含んだ波が二匹を巻き込みながら通りすぎる

キニ&・マナカ「！？」

「ドジョッチ！」

誇らしげにドジョッチは立つ

カリン「ドジョッチ、ナイスよ。ブラッキー、つきのひかり」

ブラッキーのダメージが回復していく

マナカ「やらせるか！！エルレイド、サイコネシスを自分にかけて、ブラッキーに突っ込みな！」

「エルツ！」

サイコネシスの力を借り異常な早さでブラッキーに突っ込む

マナカ「インファイト！」

カリン「あくのはどう！」

「エルツ！！！」

「ブラッキ―！」

二匹の技がぶつかり爆発する

マナカ「……」

カリン「……」

審判「エルレイド。戦闘不能」

カリン「やったわね」

クーズ「よし。相手はあと一匹。！？」

審判「ブラッキ―。戦闘不能」

カリン「！？」

マナカ「キャハハハ。キイニのテッカニンのこと忘れてたの？」

そこには爪がさらに鋭くなったテッカニンがいた

カリン「あれは……つるぎのまい」

キイニ「ふう。急かすから本調子で戦えなかったよ」

今、テッカニンは素早さ、攻撃力共に最高補正

マナカ「さっきの爆発で上手く時間を稼げたわね」

テッカニンは爆発の最中につるぎのまいをしていた

クーズ「(ドジョッチであのテッカニンを倒す手立ては……)」

キイニ「終わりにしてもいいかな？」

マナカ「私に聞いてないで早く殺りなさいよ」

狙いがドジョッチへと変わる

クーズ「……いける！ドジョッチ、みずあそび、どろあそび！」

一気に2つの技を指示する

キイニ「あゝ。せっかくテッカニンを拭いたのに、また拭かなきゃだ」

実は爆発の時に汚れていたテッカニンを拭いていた

キイニ「まあいいや。テッカニン、シザークロス！」

テッカニンが攻撃をするが、まだみずあそびとどろあそびを続けている

カリン「クーズ君！」

クーズ「……」

そしてテッカニンのシザークロスがドジョッチに当たる。だがドジョッチは止めない

マナカ「キャハハハ。もう諦めちゃってるよ。あの子」

キイニ「よし終わりだ！もう一度、シザークロス！」

テッカニンは二発目のシザークロスを放つ

クーズ「ドジョッチ！ギリギリまで引き付けて、だくりゅう！」

目には見えない早さだがポケモンは人間には持っていない感覚がある

ドジョッチのような魚は危険が察知できるほどだ

キイニ「無駄だよ。僕のテッカニンの速さについてこれるわけ……！？」

テッカニンの攻撃が当たる寸前にドジョッチは、だくりゅうを放つ

カリン「！？さっきの遊び達は、だくりゅうの威力を上げるためね」

クーズ「終わりだ！いけ、ドジョッチ！」

「ドジョー！！」

威力が上がった、だくりゅうはテッカニンを呑み込む

キイニ「テッカニン！？」

そして、だくりゅうが引いた時

審判「テッカニン、戦闘不能。よって、勝者。クーズとカリン様チ

ーム」

人々「ワァー!!」

審判「決まった〜!!ハイレベルな戦いを見せてくれた2チーム。今回の優勝者は・・・クーズ君とカリン様のチームだー!!」

カリン「やったわね」

クーズ「よっしゃあー!ありがとなドジョッチ」

「ドジョッチ!」

ドジョッチの見た目が前より凛々しくなった気がするクーズだった

キイニ「僕達が負けた・・・」

マナカ「・・・あいつ。まさかマスターキー」

キイニ「え!?じゃあ接触しちゃ」

謎の人物「さあて、お前ら話を聞こうか」

二人の後ろにお怒りな人がいる

マナカ「やっちゃったわね〜」

そしてズルズルと引き摺られながら拐われる

キイニ「だから嫌だつて言ったのに」

マナカ「まあ、諦めなさいって」

クーズ「（あ！キイニから聞くの忘れてた）」

カリン「どうしたの？」

クーズ「あ、いや、何でもないです。（まあいいか）」

そして優勝商品であるマスターボールを貰う

司会者「おめでとうございます。マスターボールです」

カリン「ありがとう」

クーズ「・・・あれ？俺のは」

カリン「？商品は一人に贈られるのよ。もちろん私にくれるわよね？」

悪魔の尻尾が見え始める。流石、あくタイプ使い

クーズ「・・・は、はい。いいです、あげます」

カリン「フッフ。ありがとね。でも私は貴方が好きよ」

クーズ「！？」

カリン「やっぱり自分の好きなポケモンで勝てるように頑張る人は良いポケモントレーナーよね」

クーズ「ですよね。（泣きたい。やっぱりか）」

何か別のことを期待していたクーズ

カリン「じゃあね」

クーズ「まあ、会いましょう」

イツキ「僕なんて」

カリン「いつまで、落ち込んでるよの」

最後はイツキを励ましていた。だがクーズはあのあと突き落とすの
だろうと密かに思っている

クーズ「よし。船長に会いに行こうか」

ものがたりの花嫁修業（後書き）

ツヤガ「ふう。脱線し過ぎだね。気を付けないと」

クーズ「まあ、ゆっくり進もうぜ！」

ツヤガ「ドジョッチの特性は鈍感にしようか危険余地にしようか」

クーズ「2つともある気がするけどな」

ツヤガ「確かに今回で危険余地。前の話のクチート戦で鈍感みたいの出てるのよね」

ものがたりの咲かない花

船長「うげえゝ。ぼげえゝ」

船長は船酔いでリバースしている

クーズ「（銀。がゲロネタやってたから大丈夫だよな）」

こちらも大人の事情ってやつかな

船長「すまないの。船長なのに情けない」

クーズ「大丈夫ですよ。船酔いしても貴方は貴方で、船長です」

ちょっと決めた言葉を言う

船長「懐かしいの。孫に似たような台詞を言われたわい」

クーズ「え？」

船長「あれは、わしが船長の成り立てだったころじゃな」

船長「出発進行！」

汽笛が鳴り、船が出発する

今日は孫を連れて船に乗っている。孫はやんちゃな時期だ。かくれ

んぼをして困らせている

船員A「ん？船長の孫のタカシ君じゃないか」

ワンリキーと一緒に仕事をしていた船員Aに見つかる

タカシ「もう、見つけないでよ。また隠れなきゃじゃん」

船員A「ハハハ。ごめんね。でも船長が心配してるから、あんまりかくれんぼしてちゃ駄目だぞ」

タカシ「大丈夫だよ。おじいちゃん、優しいもん！」

ほぼ何でも許される子供は楽でいい

船長A「そうかい。じゃあ僕はワンリキーとあっちで仕事をするからね」

そう言って何処かに行ってしまった

タカシ「よし、次はどこに隠れようかな」

船長「ふう〜、子供は無邪気でいいのう」

そのころ船長は頑張ってタカシを探していた

〜夕食〜

船長「誰か、家のタカシを知らないか？」

船長が夕食を食べている船員達に聞く

船員A「昼頃、倉庫で隠れてたのを見ましたよ」

船長「そのあとでタカシを見た者は？」

誰も居ない。船長は、てっきり夕食を食べに食堂に居ると思っていた

船長の顔は真っ青になる。その変化に気づき船員達も焦る

船長「皆、すまない。タカシを探してくれないか」

全員、食堂を出てタカシを探しにでる

クーズ「その頃から信頼度が高かったんですね」

船長「そうじゃの。船員達の信頼が無いと船長は務まらんからな」

船員B「船長！！居ました」

タカシは客室のベットで寝ていた

船長「・・・皆、ありがとう。後は任せなさい」

船員達は食堂に帰っていった

船長「全く、誰に似たのだから」

タカシ「ん？・・・うん」

いつのまにか船長室のベッドで寝ていた

タカシ「あれ？いつのまにか寝ちゃった」

周りを見渡す。船長は外にいた

タカシ「おじいちゃん！」

船長「タカシ。起きたか。全く、あんな所で寝ては駄目じゃぞ」

ちょっと怒り気味で言う

タカシ「ごめんなさい」

シヨボーンとなって反省した様子を見せる

船長「・・・タカシ。空を見てごらん」

空には無数の星が沢山ある。周りは暗いので、よく見える

タカシ「すっごーい！」

タカシの目も小さな星の仲間入りになった

船長「ワシは小さいころよく星を見るために上を見ていた。そのころから辛いことがあったら星が無くて上を見上げていた」

何か虚しい感じの空気が流れる

船長「今は違うのう。いつも下ばかりじゃ。何があって変わったんだろうか？」

タカシ「？おじいちゃんは、おじいちゃんだよ。何も変わってないよ。ほら、今だって僕と一緒に星を見てるでしょ」

無邪気に言う言葉が心に響くことがある

船長「・・・そうじゃの」

船長「その日からワシはまた空を、上を見るようになったの」

クーズ「だから俺が来たとき、外を見てたんですか」

船長「そうじゃ。ふむ、話し込んでしまったの。お礼に、これをやるう」

ひでんマシン01を貰った

クーズ「ありがとうございます」

船長「お主も何かあったら上を見るといい。解決するかもしれんか

らの」

クーズ「そうさせてもらいます」

何かを考えさせられるようになったクーズ

そして船を出た

クーズ「よしジムに行くか」

しかし重要なことを思い出す

クーズ「いあいぎりってカモネギが覚えてるじゃん・・・」

今さらである。斬れそうなウソッキーを斬ってマチスがいるジムへと進む

クーズ「失礼しまーす」

自動ドアが開きジムに入る

マチス「イエーイ！皆、元氣かい？」

客「イエーイ！」

クーズ「・・・」

どうやら今はマチスのバンド【デストロイン】のライブをやっているらしい

クーズ「名前、しょぼ。それより、あのメンバーは」

かなりの有名人が集まっている

マチス「メンバー紹介！まずギタリストのカゲツ！」

ホウエン地方の四天王の1人

カゲツ「よろしく！」

マチス「次はベーシスト！ウツギ博士！」

金銀時代の博士

ウツギ「が、頑張ります」

マチス「続いて、ドラマーのデンジだ！」

シンオウ地方のジムリーダーの1人

デンジ「みんな、よろしく！」

マチス「そして、最後！ボーカルのマチス！」

客「イエーイ！」

全員のテンションはMAXだ

クーズ「とりあえずウツギ博士が浮いてるよな」

そして終わるまでバトルが出来ないのでクイズも終わるまでライブを楽しんだ

ものがたりの咲かない花（後書き）

ツヤガ「戦闘が無いWW。次回はマチスとの対戦ですね」

クーズ「船長はあれ、何歳だ？」

ツヤガ「女の人に歳を聞くのは失礼だよ」

クーズ「いや、船長。女じゃないし！」

ツヤガ「常識に囚われていては分からないよ」

クーズ「何っ！」

ツヤガ「眠いから寝させるんだ！」

クーズ「会話が成り立ってないからな」

ツヤガ「皆、お休み！」

ものがたりの金銀財宝

ライブは大盛り上がりで夜遅くまで続いた

マチス「皆、センキュー！今日は最高に楽しいぜ」

客「アンコール！アンコール！」

クーズ「え、ちょ。皆、体力有りすぎ」

すでにクーズはバテている

マチス「じゃあ期待に答えるぜ！」

～翌日～

クーズ「やつと終わった・・・」

観客はライブが終わり帰った。クーズはこの世の終わりのような目をしている

マチス「どうしたんだい？ユー。ライブが終わったのに居るなんてかなりのfanだね！」

発音よく言う。皆も発音よく言おう

クーズ「いや。fanじゃなくてジムの挑戦者です」

マチス「oh」。そうだったんですか。よし！受けてたちます」

クーズの本音はバトルより休みたいと思っている

審判「両者、前へ！」

マチス「クーズ君。ミーに負けたらライブのチケットを貰うんだよ」

クーズ「まあ、いいですよ（意外と楽しかったからな）」

マチス「カモン。マルマイン！」

クーズ「よし。行ってこい、ドジョッチ」

二人のポケモンが場に出てくる

審判「試合開始！！」

クーズ「先手必勝。ドジョッチ。マグニチュード」

「ドジョ！」

マグニチュードは6

マチス「マルマイン。でんじふゆう」

電気の力を使い、マルマインは地面から浮く

クーズ「くっ。これで地面タイプの攻撃は喰らわないか」

マチス「そうですね。マルマイン、ころがる！」

でんじふゆうの力を使い上から、のし掛かるようにころがるを使う

クーズ「ドジョッチ。回転が止まるように、みずてっぽう」

回転の向きの力と逆方向に力を働かせる。そしてマルマインは完全に停止した

クーズ「よし。ドジョッチ。アクアテールで上にぶっ飛ばせ！」

ドジョッチはジャンプしアクアテールでマルマインを攻撃する

マチス「マルマイン。でんじふゆうを解くんだ」

でんじふゆうが無くなるがドジョッチにぶっ飛ばされる

クーズ「よしドジョッチ、みずあそびとどろあそび」

タッグ大会でやった技を使う

マチス「マルマイン、ころがる！」

マルマインは重力にしたがい速度を上げながら転がり落ちる

クーズ「ドジョッチ！だくりゆう」

ドジョッチのだくりゆうとマルマインが衝突する

マチス「マルマインの基本は爆発デース。マルマイン、大爆発！」

「ドジョー!？」

だくりゅうの中にいるマルマインが爆発し砂煙が舞う

審判「・・・マルマイン、ドジョッチ。戦闘不能」

クーズ「くっ。ドジョッチだけで勝つつもりだったが」

マチス「チツチツチ。まだまだ甘いよ、クーズ君」

マチスの狙いは弱点である地面タイプを潰すためにマルマインを持っている

マチス「さあ、ここからが本番さ!カモン、パチリス」

初めて見たときピチューの色違いと思ったのは作者だけでいい

クーズ「よし。いつてこい、カモネギ!」

カモネギとパチリスの相性は悪い

マチス「oh」。これは余裕ですね。パチリス、スパーク!」

パチリスが電気を運びながらカモネギに突っ込む

クーズ「カモネギ。はがねのつばさ!」

「・・・カモ」

カモネギの翼が鋼のように硬くなる。そしてパチリスに攻撃し、吹っ飛ばす

マチス「流石ですね。タイプ弱点だけで勝ち負けは決まらないようだ」

だがマチスの笑みは治まらない

クーズ「！？、せいでんきか」

パチリスの特性、せいでんきでカモネギは麻痺状態になる

マチス「チャンスです。パチリス。ほうでん！」

いくつもの電流が迸る。そしてカモネギに当たる

「・・・カモツ」

弱点の電気技で苦しい表情を見せるカモネギ

クーズ「あ！そうだ」

何かを思い出しバックの中をあさる

クーズ「ちゃっちらちゃっちら。長ネギ」

BGMはクーズのセルフサービスだ

クーズ「カモネギ！新しい長ネギよ！」

どこかのアンパン男の近くにいるバターな人の台詞に似ている

そしてクーズが長ネギを投げてカモネギがNice catch
する。発音よ（ry

クーズ「よし。これでカモネギは元気倍々、カモネギンだぜ！」

カモネギはカモネギンに進化した

マチス「流石ですネ。カモネギを進化させるなんて」

ただ単にカモネギに新しい長ネギを持たせたただけだけど進化らしい

クーズ「終わらせるぞ。カモネギン、エアカッター！！」

だがパチリスが動かなければ当たらない

マチス「？何の意味が」

エアカッターの風が体重の軽いパチリスを吹き飛ばす。その方向にはカモネギンがいる

クーズ「いっけー！！カモネギン、はがねのつばさ！」

マチス「なるほど。だけど負けてられませんネ。パチリス、ほうでん！！」

カモネギンの、はがねのつばさとパチリスの、ほうでんがぶつかり
合い爆発を起こす

そして砂煙が引いたころ

審判「パチリス、戦闘不能」

クーズ「よっしゃ！ナイスだ。カモネギン」

「・・・カモ、ン？」

どんな鳴き声をすればいいのか、よく分かっていない

マチス「強いですネ。ですが私のポケモンの最後は手強いですよ。
カモン！ライチュウ」

「ライ！」

ピチューの最終進化系ライチュウが出てきた

クーズ「ならカモネギ。戻れ。いけ、ピチュー！」

いい加減カモネギンは止めた。そしてピチューが出てくる

「ピチュ！」

「ライ！」

両者にらみ合う。そして試合が始まる

ものがたりの金銀財宝（後書き）

ツヤガ「なんかマチスの台詞が安定してないね。ていうかマチスってどんな喋り方だっけ？」

クーズ「そこから駄目なのかよ」

ツヤガ「まあいいです。カモネギンは遊びなので進化してませんよ」

クーズ「まあ、進化したらそれはそれで楽しそうだけどな」

ツヤガ「マチス戦が終わったら新しい仲間が増えます、多分。期待していて下さい」

ものがたりの一本杉

クーズとマチスの最終決戦が始まるところだ

クーズ「ピチュー、十万ボルト！」

マチス「ライチュウ、十万ボルト！」

いきなり二人同時に指示を出す

そして、二匹の十万ボルトが当たり爆発する

二匹のパワーは互角だった

マチス「ピュ」（口笛）。ピチューで互角ですか。ライチュウ、のしかかる！」

「ライ！」

ライチュウは跳び跳ねてピチューにのし掛かる

クーズ「ピチュー、なみのり！」

「ピチュー！」

マチス「！？」

実は船を降りた後

く回想く

クーズ「そういえば、なみのりピカチュウが居たよな」

海を見ながら、ふと思い出す

そしてモンスターボールに手を差し伸べピチューを出す

クーズ「ピチュー。海は好きか？」

「ピチュー？」

よく、わからないらしい

クーズ「そうか……。なら！海で特訓だー！！！」

「ピチュー！？」

結局、ピチューの意見なんて聞かなかった

クーズ「楽しかったな。うんうん」

すでに思い出に耽っている

マチス「（ピチューになみのりを覚えさせるクーズ君、いや、覚えるピチューの方が凄いのかな？）」

ライチュウは空中で何も出来ずなみのりを喰らう

クーズ「よし。そのまま終わらせるぜ。十万ボルト！」

十万ボルトが放たれる。しかし見てるだけのマチスではない

マチス「ライチュウ。ひかりのかべ！」

ライチュウの前にひかりの壁が出来る。これにより特殊技が効きにくくなった

マチス「これで十万ボルトも大丈夫です。ライチュウ、続けてチャージビーム！」

ピチューの十万ボルトを受けるがひかりの壁で、ほとんど喰らわない。そしてチャージビームがピチューに放たれる

チャージビームの効果でライチュウの特攻が上がる

クーズ「なら避けてから。ピチュー、マッハパンチ」

素早い動きでチャージビームを避け、マッハパンチをライチュウにお見舞する

マチス「近くに來たら危ないですよ。ライチュウ、のしかかり！」

ピチューの上にライチュウがのし掛かる

クーズ「ピチューに物理技は危ないですよ」

マチスの台詞を言い返す

クーズ「ピチュー、カウンター！」

上にのし掛かったライチュウをカウンターで吹っ飛ばす

マチス「！？」

クーズ「ピチュー。なみのり！そして十万ボルト！」

「ピチュー！！」

ピチューのなみのりに十万ボルトが混ざり威力が増す

マチス「まだです！ライチュウ、十万ボルト！」

なみのりに十万ボルトを放つ

もしこれでなみのりを撃ち破れば大丈夫だが、できなければ、自分の十万ボルトで更に威力が上がった、なみのりを喰らう

クーズ「（チャージビームで特攻が上がっている）」

少し心配そうなクーズ

そして結果は・・・

「ピチュー！！！！」

ピチューの勝ちであった

マチス「!？」

ライチュウは十万ボルトを含んだなみのりを喰らう。ひかりの壁があるが、関係ないほどの威力だった

審判「ライチュウ、戦闘不能! よって勝者、クーズ！」

クーズ「よしやあ! ありがとな。ピチュー！」

「ピチュー！」

クーズは少しでもピチューのことを信用出来なかった自分を憎んだ

クーズ「ああ。ピチューは俺の最高のパートナーだよな」

「ピチュー？」

しかしボールからカモネギとドジョッチが出てきて騒ぐ

「・・・カモ」「ドジョッチ」

クーズ「ごめん。ごめん。お前らも俺の最高のパートナーだよ」

謎だらけで不安になっているクーズだが仲間が居れば大丈夫だと思
った

マチス「流石ですネ。これがバッジです」

オレンジバッジを手に入れた

クーズ「ありがとうございます」

マチス「クーズ君。君のポケモンは本当にエキサイティングだったよ。またミーと勝負しようネ」

笑顔で握手を求められる

クーズ「はい。よろこんで」

クーズはマチスと握手をする

何故かマチスと友情を深めたクーズだった

くディグダの洞窟前く

クーズ「なんでディグダがこんな所にまでいるんだ？」

ディグダ達が洞窟から出ていた

クーズ「よし、ドジョッチ、出てこい。ディグダの話を聞いてくれ」

「ドジョ」

「ディグダ。ディグディグディグダ」

そして話を聞いたドジョッチは号泣していた

「ドジョ」

クーズ「え？ごめん。分かんないから、ドジョッチ。おうい」

だが泣き止まないドジョッチ

クーズ「ドジョッチって涙もろいのか・・・」

ドジョッチの新たな性格を見つけたクーズだった

ものがたりの一本杉（後書き）

ツヤガ「またまたまた脱線！」

クーズ「もう進める気がないだろ」

ツヤガ「いやだって省いたら大変なことになるよ。多分」

クーズ「多分って何？」

ツヤガ「まあ、それはちょっと置いといて。今回はライチュウとピチュウの戦いで良いイメージが思い浮かばなかったのでテキストに流しました」

クーズ「そうなんだ」

ツヤガ「さてさて新しい仲間とは誰でしょうかね？」

クーズ「嫌な予感しかないけどな」

ツヤガ「では また次回に ノシ」

ものがたりの潔癖

結局、事情が分からないまま洞窟に入る

クーズ「？あれは・・・人影か」

薄暗い中で良く見えない

その人影はハッキリ見え始めると人影とは言えないことに気がつく

クーズ「・・・！？」

その影はクーズに気づき本体が良く見えるようになった

「人間か・・・」

白い体に最強レベルのサイコ能力。その名は

クーズ「ミュウツー！！」

「うるさいな。我が、そんなに可笑的いか」

ミュウツーはクーズを睨み付ける。ちなみにアルセウス同様、脳内に直接話している感じです

クーズ「いやいや。何でここに居るんだよ」

「あの洞窟は誰も来なくてな。暇だから外に出たのだ」

なんか自己中なこと外に出たらしい

「だが町に出れば人間は我のことを宇宙人呼ばわりし」

クーズ「（そりゃ。一般人はミュウツーなんて知らないもんな）」

「だから我は、また洞窟に身を潜めた。この洞窟は面白いな。我の居た所のポケモンと違うポケモンが出るようだ」

逆にハナダの洞窟のポケモンが他の洞窟で出たらゲームバランスが壊れる

クーズ「（原因はミュウツーか）ミュウツー。悪いがハナダの洞窟に帰ってくれないか？」

「！？何故だ。人間」

ミュウツーは今にもキレそうだ

クーズ「いや。こいつらが住めなくなるんだよ」

後ろに居たディグダ達を見せる

「・・・それは我のせいではないぞ」

クーズ「・・・へ？」

クーズは拍子抜けした

「我も注意したが無理だった。だからと言って、戦闘でも倒せない」

ミュウツーが戦闘で倒せない相手が居るらしい

クーズ「（どんなポケモンなんだ？）分かった。案内してくれるか」

「ふむ、こちらだ。そういえば名前を聞いてなかったな」

クーズ「ああ。俺はクーズだ」

「なるほど。ドクスか」

今まで言われた名前間違えの中で一番ヒドイ

クーズ「（意外と毒舌なんだな・・・）」

多少、落ち込んでミュウツーに案内される

クーズ「・・・」

クーズが見た光景。それは

目がハートなダクトリオがムチュールに群がっている。まさにムチュールのための楽園だ

「ムチュ？」

ムチュールがクーズに気づき反応する

クーズ「ミュウツー。お前、ムチュールに勝てなかったのかよ」

ミュウツーの方を見ると目がハートマークになっている

「何を言っただ。あの丸いボディ、そして綺麗な唇。良い所しかないでわないか」

ミュウツーは完全にアブノーマルなポケモンだった

クーズ「（駄目だ。このゲームの伝説って終わってる）」

そして、クーズはムチュールの前に出る

「ムチュ」

少し、顔を顰める（しかめる）

クーズ「ムチュール。お前の悪事は、俺が許さないぜ。行ってこい、ドジョッチ！」

「ドジョ！」

ドジョッチは鈍感なのでムチュールにメロメロにならない

「ムチュール！」

ドジョッチの前にムチュールが出てくる

クーズ「正々堂々きたか。ドジョッチ、みずのはどう！」

ドジョッチから水の輪が出されムチュールを狙う

「ムチュ！」

だがムチュールもただ者ではない。攻撃を避け、ドジョッチに近付き、はたくをする

クーズ「！？」

ムチュールのはたきがヒットしたドジョッチは壁に吹き飛ばされた

「気を付ける。そのムチュールは色々おかしいからな」

今さら助言してくるミュウツー

クーズ「ちつ。ドジョッチ。だくりゅう！」

狭い洞窟の中で広範囲の攻撃。十中八九、当たるだろう

「ムチュー！！」

ムチュールは、こなゆきを使う。ドジョッチのだくりゅうは見える見る内に凍る

クーズ「！？防がれた」

だがムチュールは次の行動に移行しない

「ドジョー！」

凍った、だくりゅうの上からドジョッチがジャンプしてきた

クーズ「よし、ドジョッチ。アクアテール！」

落ちながら放ったアクアテールはムチュールに見事当たる

「ムチュール」

クーズ「よし、チャンス！ いけー」

まだ残り60個くらいあるハイパーボールを投げる

ぽん　ぽん　ぽん

ポーン！

クーズはムチュールを捕まえた

クーズ「よし！ 捕まえたぜ。これでこの洞窟は、またディグダ達が安心して住めるな」

しかし1つ疑問が残った

クーズ「そういえば、なんでムチュールは動かなかったんだ？」

「あれはムチュールが氷に映った自分の姿に見とれていたからだ」

自分を愛しすぎた故の弱点だった

クーズ「・・・まあいいか。次はイワヤマトンネルだな」

次の目標も決まっているので、その目標に突き進む

ものがたりの潔癖（後書き）

ツヤガ「ドジョッチがカッコいいね」

クーズ「まあ考えると一番最初に手持ちに來たポケモンだしな」

ツヤガ「さて、ムチュールは、かなりの曲者だね」

クーズ「進化したらルージュラか。嫌な予感しかない」

ものがたりの扉

今、クーズはイワヤマトンネルの中である

クーズ「ふう。ピチューが居るから、そこそこ見えるな」

ピチューが少し電気を漏らして光っている。フラッシュなんて要らなかった

クーズ「しかし、何も居ないな」

トレーナーも居なければポケモンも居ない

そして何も無いままイワヤマトンネルを抜ける

くシオンタウンく

ここはBGMがトラウマな町。作者は音を消して頑張りました

クーズ「まあ、お化けの正体はゴース達だし、無視してタマムシシティに行くか」

特に何もせずタマムシシティに向かった

くタマムシシティく

クーズ「ロケット団は居るからコインスロットのポスターの裏にスイッチがあるな」

コインスロットに行き、ポスターの前にいるロケット団を倒して隠し通路を出す

クーズ「あゝ。あのクルクル回るタイルか。あれって回らなくても平気だよな」

完全にゲームを無視する

ロケット団「！？貴様。誰だ！怪しいやつ！」

クーズの元に走ってきた

クーズ「あゝ。そのタイルは回らないといけないんですよ」

ロケット団「むっ。そうだったな。そりゃ」

ロケット団のしたっぱは律儀に回る

クーズ「ピチュー。十万ボルト」

「ピチュー！」

ロケット団「うぎやややああああ」

ロケット団は丸焦げになる。これでは、どちらが悪者なのか分からない

クーズ「さあて、サカキでも倒すか」

面倒なのでロケット団はリアルファイトで倒していった

そしてサカキが居る部屋のドアの前に来て、ドアが開く

聞き覚えのある声「よう。クズ、待ってたぜ」

そこには真つ赤な髪、ロケット団とは少し違う服装をしたグストがいた

クーズ「！？なんでお前が」

グスト「別に俺が居たっておかしくねえだろ？」

回転する椅子の上で回りながら言う

クーズ「ここはロケット団のアジトだぞ。お前がいた」

グスト「侵略した。これでいいだろ？」

この前も同じことを言われた

グスト「俺らデフェク団のこと知りてえか？」

クーズ「ああ。もちろんな」

緊迫した空気が流れる

グスト「いいぜ。そのかわり俺にバトルで勝つたらな！！」

その瞬間、部屋の隅にあったロッカーのドアがブツ飛んだ

クーズ「！？」

ロッカーからは白い髪、グストと同じ服装をした人が出てきた

謎の人物「グスト。分かってるだろうな」

グストの表情が曇る

グスト「逃げるが勝ちだな！！！」

クーズの横を通り部屋を出ようとする

謎の人物「さて、帰って、説教だな」

素早く動いたグストだったが部屋を出る前に捕まった

謎の人物「クーズ。貴様が謎を解きたいならポケモンリーグに来い。そこで待っててやる」

グスト「おいおい。マジかよ。戦うのけっこう先じゃねえか」

謎の人物「ったく。お前といいマナカといい、面倒な奴等しか居ないな」

グスト「ちょ。キイニはどうした。あいつは良いのかよ」

謎の人物「キイニはただ振り回されてるだけだ。見てわかる」

何故か普通の会話をしている二人

クーズ「えゝ。会話中すいませんが、貴方は一体？」

謎の人物「俺はデフェク団の幹部の一人、アクティード。これ以上のことは教えられない」

そう言つて、グストをロッカーに無理矢理、詰め込みアクティードもロッカーに入つた

クーズ「・・・え？。あれ、おかしいよな」

ドアは、いつの間にか復活しており、グストとアクティードがロッカーに入つた

クーズ「・・・」

恐る恐るロッカーのドアを開ける。しかし、そこには掃除道具とシルフスコープしかなかった

クーズ「（ロッカーの中は四次元ポケットか）」

不思議なことを思いながら、シルフスコープをゲットし、ロケット団のアジトを出た

クーズ「よし。次はエリカだな」

ジムリーダーであるエリカに挑戦しに行くクーズ

途中の斬れそうなウソッキーを斬ってジムに行った

ものがたりの扉（後書き）

ツヤガ「もう眠いです。布石をするの面倒ですね」

クーズ「まあ。いつも土壇場じゃな」

ツヤガ「え？いつも土壇場で考えてるけど」

全く布石の意味は無かった

クーズ「行き当たりばったりの小説って、大丈夫かよ」

ツヤガ「今さらだね」。大丈夫だよ。テキストに書いとけば評論家じゃない限り上手く書けてる感じになるから」

クーズ「（絶対、その考え間違ってるだろ・・・）」

ものがたりの勤務

クーズ「うわゝ。女の子ばかり」

エリカのジムは女の子限定のジムである。挑戦者も女の子で無くてはいけない

クーズ「それって俺は入れないってこと？」

エリカ「はい。そうです。まあ、女装するなら考えてもいいですよ」

そう、このエリカのジムを挑戦した者の多くは女装にハマる

クーズ「（え？なにこれ。ポケモンって、そんな異常なこと開発するゲームだっけ）」

謎を解くため、ジム攻略は必須。仕方なくクーズは女装になるため
試着室に入った

エリカ& amp・ジムのトレーナー「!？」

試着室から出てきたのはミニスカートの女の子だった

エリカ「クーズさん。合格です！もう私たちは仲間です」

クーズ「ちょ。勝手に仲間にするな」

ジムのトレーナー達が全身を見れるような鏡を持ってきた

クーズ「・・・なんじゃこりゃー」

どうせ内心、俺、似合ってるかと思ってます

クーズ「思ってないから！」

エリカ「駄目ですよ。女の子は綺麗で居なくては。もちろん言葉使いも」

エリカに女の子指導をされる

クーズ「（やばい。ハマったら色々な意味で不味いぞ）そんなことよりバトルしましょうよ」

精一杯の女の子の真似をするクーズ。そしてエリカも了承した

審判（女）「これからエリカ様とクーズちゃんの試合を始めます」

「きゃー。クーズちゃん、かわいいー！」

「エリカ様も頑張ってー！！」

審判（女）「両者。前に」

エリカ「負けたら私達の仲間になってもらいますね」

クーズ「ま、負けられせんわ」

クーズはガチだ

審判（女）「試合開始ッ！！」

クーズ「華麗にいきます。出なさい、ムチュール」

「ムチュー！」

エリカ「舞を踊る花達を見せましょう。ウツボット」

「ウツヨー」

そして試合が始まる

クーズ「ムチュール。こなゆき、全力よ」

「ムチュー！」

「ウツヨー」

一瞬にしてウツボットが凍りつく

審判「ウツボット。戦闘不能！」

エリカ「さ、流石ですね。では、次は・・・ラフレッシュ」

「ラフヨー」

クーズ「ムチュール、こなゆき！」

ラフレッシュが出てきた瞬間ムチュールのこなゆきを放ち、ラフレッシュが凍りつく

審判「ラフレッシュ。戦闘不能」

エリカ「・・・キレイハナ！」

「ワタシツテキレイネ」

クーズ「ムチュール。こなゆき!!」

またまた出てきた瞬間に凍りつく

審判「キレイハナ。戦闘不能」

エリカ「・・・なめとんのかー!!。おい。そのクズ!ぶつ殺すぞ」

エリカのキャラが一瞬にして崩壊した

エリカ「まず作者!テメー面倒だからってテキトーにすんじゃねえよ!!ああ?」

不味い発言までしてきましたね

クーズ「(どうすんだ。これ)」

エリカ「ちつ。あとで作者、ぶつ殺す。いけ!シェイミ!!」

「シェイミ!」

クーズ「ムチュール。こなゆき!」

クーズは、またこなゆきを一瞬にして出す

エリカ「なめんじゃねえよ!最近仕入れた、このシェイミを!!!シェイミ、シードフレア!!」

シェイミの体の中から衝撃波が発生する

クーズ「!？」

こなゆきは簡単に粉碎されムチュールにシードフレアが当たりムチュールが吹っ飛んだ

審判「ムチュール。戦闘不能」

クーズ「(あのシェイミ。不味いな)いきなさい。カモネギ」

「・・・カモ」

エリカ「雑魚が!シェイミ、エナジーボール!」

緑色の球体のカモネギを襲う

クーズ「カモネギ。空に逃げろ!」

カモネギは飛び立ち、エナジーボールを避けながら天井近くに行く

クーズ「(これなら衝撃波であるシードフレアの威力が弱まる。あとは、どうやって攻撃をするかだな)」

しかし、これはフラグである

エリカ「シェイミ!飛べ!!」

「シェイミ!」

シェイミが進化とは少し違う光を出しながら姿を変える

クーズ「スカイフォーム!？」

エリカ「ざまあみやがれ!シェイミ、シードフレア!！」

衝撃波がカモネギを襲いカモネギは落ちる

審判「カモネギ。戦闘不能」

クーズ「(残りはピチューとドジョッチ。でも勝たないと、この小説が終わる)」

なんか小説が終わるかもしれない

クーズ「いきなさい。ピチュー!」

「ピチュ」

エリカ「終わらせてやるよ!!何もかもな!!」

ものがたりの勤務（後書き）

エリカ「作者どこだー！！」

鬼の形相で作者を探す

ツヤガ「私って代理だから大丈夫だよな？」

クーズ「え、知らないわ。でもエリカがこんな性格だなんて」

ツヤガ「ぷっW。似合わないよ」

クーズ「うるせー。俺だってやりたくないから」

エリカ「いつもの、しゃべり方してんじゃねえよ、クズ！」

胸ぐらを掴まれて脅迫されるクーズ

クーズ「は、はい。す、す、すみませんでした」

ツヤガ「次回更新されるのかな。作者が死ななきゃいいけど」

ものがたりのラスク

クーズ「ピチュー、でんじは！」

「ピチュー！」

まずは動きを鈍らせる作戦に出た

エリカ「なめんじゃねえって言うてんだろ！！シェイミ、避けてマジカルリーフ！」

不思議な色をした葉がピチューを狙う

クーズ「ピチュー、避けて」

ピチューはマジカルリーフを避けた

「シェイミ！」

だがマジカルリーフは相手を追尾する能力を持っている

クーズ「！？」

葉が急にピチューの方に来た。ピチューは反応出来ず喰らう

エリカ「ヒヤハハ。こんなことくらい覚えとけよ、クーズ！ラスト、シードフレア！」

衝撃波がピチューを襲う

クーズ「やらせません！ピチュー、衝撃波に十万ボルト！」

十万ボルトは衝撃波に当たり爆発を起こす。しかし衝撃波は止まらない

クーズ「アニメ通りにいけるはずよ。ピチュー、アイアンテール！」

「ピチュー！」

「これはタマムシにて」

クーズ「マンションの屋上でジューズ買おうかな」

おまわりさんのイベントついでにクーズは休憩しようとしている

だがマンションを登っている時、何か音が聞こえる（階段を使つて
ます）

クーズ「？気になるな……。よし、いこ」

クズさん手のなる方へ。ではないがクーズは音の鳴る方へ行く

「ピカチュウ。十万ボルト！」

「ピツカ！」

クーズ「（なんかポケモンのアニメ見てるな）」

そこにはポケモンのアニメを見ている少年がいた

少年「あれ？お兄ちゃんもポケモンを見に来たの？」

クーズ「いや。音が聞こえて気になっただけさ」

少年「へー。じゃあ聞こえたなら一緒にテレビ見ようよ」

クーズ「うーん。・・・まあいいか」

時間があるのでテレビでポケモンを見る

少年「流石、サトシのピカチュウだね」

少年とクーズはアニメのことについて話したりする

そして時は過ぎ

クーズ「よし、そろそろ行こうかな」

クーズは立ち上がる

少年「もう行っちゃうの？」

少年の目は少し悲しそうだった

クーズ「悪いな。ちよつとやることがあってね」

そう言つてクーズは少年にバイバイをし、また階段を登り始めた

クーズ「よし。おいしいみずを買つたぜ」

自動販売機で目当ての物を買う

クーズ「ソーだ。あいつの分も買つていくか」

そういえば少年の名前は聞いていなかった。クーズは少年の分の水
を買い少年の居た所に帰る

クーズ「・・・あれ？居ない」

そこには少年が居なかった。いや少年だけでないテレビさえ、少年
がいたスペースさえない

クーズ「どうなつてんだ」

だが少年の変わりに一枚の手紙があつた

クーズ「？」

いきなりだけど実は僕、お化けなんだよね。ちよつとした理由があ
つてね

誰も気づかないと思つてたけどお兄ちゃんだけが気づいたよ

多分、お兄ちゃんが持っているシルフスコープのおかげかな？

でもスコープから見てないし、見えるはずないんだけどね

とりあえず、僕を見つけた賞品としては、なんだけど、ここに【アイアンテール】の覚え方、書いておくね

そして、その後はアイアンテールの覚え方が書いてあった

クーズ「……今まで、お化けとポケモン見てたのかよ」

そして、不思議な体験をしたクーズは少年のために買った、おいしいみずを手紙があった場所に置いた

クーズ「うん。今でも疑問しかないよな、あの体験」

クーズが悩んでる間にピチューのアイアンテールが衝撃波にぶつかる

十万ボルトで威力が弱くなったシードフレアをピチューは力でねじ伏せる

エリカ「ちっ。面倒だな！シェイミ、マジカルリーフ」

また追尾する葉がピチューを襲う

クーズ「ピチュー、十万ボルト！」

ピチューの攻撃で葉は丸焦げになる

エリカ「あめえよ！」

シェイミはいつのまにかピチューの後ろに居た

クーズ「（シードフレアか！）ピチュー、アイアンテール！」

一回転してシェイミにアイアンテールで攻撃する

エリカ「死にな！シェイミ、シードフレア！！」

クーズ「まだです！ピチュー、尻尾に電気を集中させなさい！」

ピチューの尻尾に電気が集中して眩しく光る

エリカ「どんなことしたって勝てるわけないんだよ！！」

シードフレアと電気を大漁に帯びたアイアンテールがぶつかり爆発を起す

審判「ピチュー。戦闘不能」

シェイミはダメージを喰らったが倒れていない

クーズ「（くっ。まだ倒れないか。残りは、こいつしかないない）いきなさい、ドジョッチ！」

「ドジョー！」

エリカ「ハハハ。もう終わりだな！！シェイミ、シードフレア！！」

何回目か分からないシードフレアがドジョッチを襲う

クーズ「ドジョッチ。爆発しないでね。のみこむ！」

シードフレアのエネルギーをカービ。の吸い込みのように飲み込んでいく

だが、かなりの量だ。

エリカ「！？あれ、ノコッチじゃねえか」

いやドジョッチがエネルギーの飲み込みすぎで腹が大きくなりノコッチに見えるだけである

クーズ「よし。終わりです。ドジョッチ、はきだす！！」

シードフレアのエネルギーを増大させシェイミに放つ

エリカ「まだだ！シェイミ！マジカルリーフ、シードフレア、リーフストーム！」

シェイミは後ろに下がりながら言われた順に技を放つ

幾度も爆発が起きる。そして結果は

審判「シェイミ。戦闘不能。よって勝者、クーズちゃん」

クーズ「（ふー。なんとか勝った）」

エリカ「私が・・・負けた・・・」

なんか滅茶苦茶、落ち込んでいる

く色々あつてく

クーズ「よしやあ。4つ目のバッジをゲットしたな。もう半分まで来たのか」

半分、取るまで色々あつたと考える

クーズ「じゃあイベント攻略していくか」

ものがたりのラスク（後書き）

ツヤガ「さあてピチューが完全にサトシのピカチュウになりそうですね」

クーズ「カウンター覚えてるから大丈夫、大丈夫」

ツヤガ「（なんでヒカリ？）まあ、それならいいですけど。ようやく終盤の設定やストーリーが決まったので、進み具合がかなり早くなると思います」

クーズ「ああ、脱線の連続だからな」

ツヤガ「うん。脱線のための布石は、いっぱいあるもんね」

クーズ「今回の少年とかか。」

ツヤガ「そうそう。あと船長の孫とか」

クーズ「（消化するのに時間掛かりそうだ）」

ものがたりの悪霊退散（前書き）

ツヤガ「今回は無駄に変な奴らとコラボ（？）しています。苦手な方は、難しいと思いますが気を付けて下さい」

ものがたりの悪霊退散

クーズ「よし。金の入れ歯ゲットだ」

現在クーズはサファリパークにいる

シオントウンでカラカラのお母さんを成仏させロケット団を倒し、ポケモンの笛を貰った

そして、途中にいるカビゴンを倒し、サイクリングロードを下ってきた

クーズ「よし。帰るか」

サファリパークを終わらせ園長に会いに行く

園長「ふがつ。ほがふがほがふふふひふへへ。さーないとちゃん
はあはあ」

何か奇妙な台詞に聞こえたが間違えだろう

クーズ「園長。きんの入れ歯を取ってきたぜ」

園長にきんの入れ歯を渡す

園長「ふがつ。ふふひ。ふう。いやゝ助かった。ありがとな少年よ」

きんの入れ歯を装着！してちゃんと喋れるようになった

クーズ「あ。俺の名前はクーズです」

自己紹介をしていなかった

園長「おお。そうかクーズ君か。そうじゃな、お礼にかいりきをやるう」

秘伝マシン04を貰った

クーズ「ありがとうございます」

そして園長の家を出る

クーズ「!？」

家を出た瞬間、明らかに怪しい五人組がいた

クーズ「(あの服装は・・・巫女とかのアレか?)」

男「ふうん。貴様には悪霊が取り付いているな」

クーズ「あ、悪霊ですか・・・」

男「ふむ。悪霊を取り除くぞ！」

クーズ「ええ!？」

そして五人は謎のポーズをとる。そしてBGMが流れ始めた

「あらゆる困難が科学で解決するこの平成の時代。

人々の閉ざされた心の闇に蔓延る魑魅魍魎が存在していた。

科学の力ではどうしようも出来ない、その奇っ怪な輩に立ち向かう
神妙不可思議にて胡散臭い男がひとり・・・

その名は、矢部野彦磨

そう、人は彼を陰陽師と呼ぶ（ドヤッ」

「「悪霊退散 悪霊退散

怨霊、もののけ、困った時は

ドーマン！セーマン！ドーマン！セーマン！

直ぐに呼びましょ陰陽師！！

レッツゴー！！！！」

チーン。「イエーイ×4回」

あとは動画サイトあたりで聞いてください

クーズ「（これ、完全に作者のイタズラだろ・・・）」

正解だ。よく分かったな。この前、ふと聞いたら書きなくなった

「ピチュ！ピチュ！」

陰陽師達と一緒にピチューが踊る

クーズ「あー、ダメダメ。真似したら変なポケモンになるから」

直ぐ様、ピチューを抱き抱える

だがピチューを抱き抱えると恒例のアレが来る

「ピチューー!」

十万ボルトがクーズに直撃する。そしてクーズは倒れる

彦磨「ふむ。悪霊は去ったようだな」

クーズ「（いや。これはピチューのせいだろ・・・）」

久々に喰らい、痺れがまだ取れない

彦磨「では、本題に入るか」

まだ倒れているクーズの前に彦磨が座った

彦磨「今回、用事があるのは悪霊でも、もののけでもない。そのピチューだ」

「ピチュー?」

顔を傾げるピチュー。クーズは痺れが取れ、座る

クーズ「ピチューになんの用だ?」

彦磨「最近。ある力が増大してきているのだ」

真剣モードに入る

クーズ「ある力・・・？」

彦磨「その力が詳しくどんな物か分かんが、恐らく負の感情によるものだろう」

クーズ「（負の感情・・・）」

彦磨「我々、陰陽師は恨みや憎しみを宥めることも仕事の1つでな。この力は負の感情だと思うのだ」

ピチューは聞きあきて眠たそうである

クーズ「必ずしも負の感情ではないと？」

彦磨「ああ。もしかしたら似ている力かもしれんしな」

クーズ「似ている力？」

彦磨「例えば、育児になれてない人が赤ちゃんの世話をした時に、大変だなあ、と感じる時の感情などだ」

クーズ「あ、ああ。（分からない・・・）」

彦磨「そんなことは問題ではない！そのよく分からない力に対抗すべく、抽選で選ばれた貴様のピチューにスペシャルな技を教えるだろう」

クーズ「おお！（抽選ってなんだ。抽選って）」

彦磨「貴様に断る権利などない！！こい、こっちだ！」

断る気は無かったが無理矢理、連れ去られた

場所は園長の家の後ろにある庭だ。ギャラドスが釣れる場所の1つ

彦磨「では。始めるぞ」

恐らく修行が始まるのだろう

彦磨「こい！ヨノワール」

「ヨノー」

クーズ「よし。いってこいピチュー！」

「ピチュー！」

彦磨「貴様から、こい！力を見極めてやる」

ずいぶんと余裕があるようだ

クーズ「最初から、そのつもりだ！ピチュー、十万ボルト！」

「ピチューー！！」

渾身の十万ボルトがヨノワールに当たり爆発が起こる

そして煙が引いた後ヨノワールの姿が見える

彦磨のヨノワールは十万ボルトを喰らっても全くダメージを受けて

いない

クーズ&picture「!？」

彦磨「ふむ。この程度か」

試合はまだ始まったばかりだ

ものがたりの悪霊退散（後書き）

ツヤガ「ホントなんで出てきたの？」

クーズ「俺にも分からないし」

いや。ほら、気分で投稿するから気分で内容が決まるんだよ

エリカ「作者テメーッ！！！」

！？やばい。あとヨロシク！

作者はエリカから素早く逃げる。しかし見えなくなった所で悲鳴が聞こえた

ツヤガ「・・・まあいいや。ピチューに技を教えますね」

クーズ「ピチューばかりが強くなっていくな」

ツヤガ「ピチューは進化しないから種族値で考えると一番弱いよ」

クーズ「そう考えると技で補正をかけてる感じが」

ツヤガ「そうかな。では また次回に」

ものがたりの泣き寝入り

現在、彦磨と修行中

クーズ「なら。ピチュー、なみのり！」

彦磨「ほう。なみのりか」

驚いた表情を見せない。冷静沈着である

彦磨「ヨノワール。じゅうりよく」

ヨノワールを中心に重力が強くなり、なみのりがただの水になった

クーズ「まだだ。ピチュー、十万ボルト……」

「ピチュー！」

最初よりも威力が上がっている

彦磨「ふむ。ヨノワール受け止める」

またもヨノワールは受け煙が舞う

クーズ「ピチュー。わるだくみ」

「ピチュー、ピチュー」

特攻が二段階上がる

彦磨「厄介になる前に倒す！ヨノワール、かげうち」

急にピチューの影からヨノワールが現れる

クーズ「！？」

彦磨「そこからシャドーパンチ！！」

ヨノワールの腕に力が集中しピチューを殴り飛ばす

クーズ「（あのコンボを破るには・・・）」

ピチューは苦しい表情を見せるが立ち上がる

彦磨「次で終わりだあ！ヨノワール。かげうち、シャドーパンチ！」

さっきのコンボをしてくる

クーズ「やるしかない！ピチュー、ポイズンテール！！」

「ピチュ！」

ヨノワールのシャドーパンチを回転しながらのジャンプで避ける

彦磨「！？」

クーズ「いつけー！！」

ピチューの尻尾に毒の力が集中し、ヨノワールを尻尾で叩き付ける。

かなりの威力だ

彦磨「急所に毒か。なかなかやるな。だが！」

ピチューの攻撃はヨノワールの急所に当たり毒を与えた

彦磨「ヨノワール。いたみわけ！」

「ヨノワ！」

突然、ピチューが苦しみだす

クーズ「ピチュー。終わらせる。もう一発、ポイズンテール！」

終わらせるつもりでクーズはピチューに指示をする

彦磨「甘い、あまああい！！ヨノワール。避けてシャドーパンチ
！！」

二度目は喰らわない。それが強者だ

クーズ「ピチュー！！！」

体力が減っている状態で、もろにヨノワールの攻撃を受けた

彦磨「終わりか。・・・！？」

まだピチューは立ち上がった。しかし今までのピチューとは違う

クーズ「（この感じ。グストと戦った時に出た、あれか！）」

ピチューから大量の電流が迸る

クーズ「よっしゃあ！ピチュー、十万ボルト！！！！」

「ピッチュー！！！！」

今までとは比べ物にならない十万ボルトがヨノワールを襲う

彦磨「くっ。ヨノワール、シャドーボール！」

しかし、ピチューの十万ボルトに直ぐ消される

クーズ「終わりだあああ！」

ピチューの十万ボルトがヨノワールに当たり大爆発を起こす

クーズ「やったか！？」

そこにはまだ倒れていないヨノワールが居た。だが気絶しているのか目が閉じている

彦磨「・・・ぶよぶよするなー！！」

「・・・ヨノワール！」

その声でヨノワールが目覚めた

クーズ「！？」

彦磨「真のトレーナーとは自分のポケモンの限界以上の力を引き出せるトレーナーだよ！」

クーズ「真のトレーナー……。俺は、そんなトレーナーだろうか？」

ピチューは瀕死寸前だ

彦磨「終わりだよ！ヨノワール。シャドーパンチ！！！」

「ヨノワール！」

クーズ「やらせない！ピチュー、十万ボルト！！！」

「ピ、チュ」

だが十万ボルトを打つ前に倒れた

クーズ「！？ピチュー！」

気絶したピチューの元へ走り、抱き抱える

クーズ「……俺がまだ未熟なトレーナーだから、ピチューがこんな風に」

ヨノワールをボールにしまい、近づいてきた彦磨

彦磨「そう思うなら強くなれ。強くなれば、そんなことも無くなる」

クーズ「……でも、どうすればいいんだ？」

とりあえずクーズなりに今まで頑張ってきたはずだ

彦磨「我がここに居る理由は負の感情に対抗するためだ」

クーズ「・・・え？」

彦磨「貴様も、ついでに鍛えてやろう」

そうして、彦磨との修行が始まった

「ある程度、経った」

クーズ「・・・よし！行くか」

修行が終わったクーズ。外見に変わりはないが何か変わったのだろうか？

そしてセキクシティのジムリーダー、キョウに勝負を挑んだ

キョウ「ふむ。澄んだ目をしている。貴様、なかなかやるようだな」

クーズ「えーと。ありがとうございます」

何故かキョウに褒められた。

キョウ「だが負けるつもりはない。いけ、マタドガス！」

「マタドガス」

クーズ「修行の成果。見せてやるぜ！！いけ、カモネギ！」

「・・・カモ」

審判「試合開始！」

ものがたりの泣き寝入り（後書き）

ツヤガ「え」と。また放置しましたW。マイペースで更新するので、そこはよろしくお願いします」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8394v/>

ポケットモンスターの可能性

2011年12月17日12時59分発行